

『時規物語』巻之一におけるアメリカ捕鯨船について(二)

森 田 勝 昭

はじめに

筆者は『時規物語』巻之一におけるアメリカ捕鯨船について(一)「名古屋大学総合言語センター言語文化論集第Ⅶ巻第2号(一九九一)」で、天保九年(一八三九)、越中富山木町浦吉岡屋の北前船「長者丸」が仙台唐丹沖で漂流をはじめ、翌年アメリカ捕鯨船に救出されてからハワイにつくまでの経緯を、主として捕鯨船の航海日誌、アメリカ側の港湾記録、新聞、雑誌等の史料と日本側の史料を比較検討することで、辿ってみた。

第一節では利用した史料の概略を述べ、第二節では

救出したアメリカ捕鯨船の船歴、船長の経歴、乗組員の同定を行なった。第三節では、救出日時、救出地点、救出当日の出来事の再構成を試みた。第四節では漂流民達が四グループにわかれ分乗した捕鯨船四隻の同定を試みた。第五節では航海日誌の記録をもとに救出に当たった James Loper 号が太平洋に描いた航跡を再構成し、地図を添付した。

本論は(一)の続編であり、漂流民達が捕鯨船上で目撃、経験した日常生活や捕鯨作業に焦点を絞ってアメリカ側の史・資料と『時規物語』の記述とを比較検討した。(一)同様、本論でも、特に指示しないかぎり漂流談からの引用は『日本庶民生活史料集成』所収の『時規物

語』ならびに『蕃談』の翻刻版であることを断つておく。

本論執筆にあたり、(一)同様、アメリカ各地の歴史協会、捕鯨博物館、図書館などから協力をいただいた。

James Loper 号の母港であるNantuketのNantuket Historical Associations からは一九世紀捕鯨船の航海日誌等の史料を提供していただき、本論に使用する許可を頂いた。同協会のMrs. Philip S. Herring 氏と、Gayle Michel 氏からは、筆者からの度重なる問い合わせに対する回答と激励を頂いた。New BedfordのOld Dartmouth Historical Society Whaling Museum からも航海日誌や港湾記録の提供を受け、かつ本論に使用する許可を頂いた。同協会のVirginia M. Adams 氏からは多くの情報、助言、激励を頂いた。またUniversity of Hawaii Library からは、当時のハワイの港湾記録や新聞等の史料を提供して頂いた。National

University of Australia Pacific Manuscripts Bureau からも多くの参考史料の提供を受けた。慶応大学文学部川澄哲夫教授からは、激励の連絡と氏がまとめ挙げ

た広翰な史料集を頂いた。また、(一)で頻繁に引用させていただいた高瀬重雄氏、矢守一彦氏からも激励の言葉を頂いた。感謝したい。

捕鯨船の航海日誌は原本のマイクロフィルムから著者が判読した。航海日誌は時として判読困難なものがあり、著者による推定箇所は()で、判読不可能な箇所は(****)で示した。判読の誤りの責任は全て著者にある。本論は基本的に航海日誌に基づいて展開されるが、本文に入れると煩雑になるため、ほとんどの場合(註)に入れておいた。

六 『ダーフ』と申すもの有之候——捕鯨船の日常生活——

長者丸の乗組員達は捕鯨船の生活に慣れるに従って、周囲の出来事を事細かに観察するようになる。

『時規物語』では、食事のことが頻繁に話題になっている。六か月の漂流中、一日米二合を一〇名の食分量と決め、「夫に昆布を刻込、粥に炊、塩鮑を潮に漬

し、木にて能々たゞき和にいたし、在合の鯉節を入、雨水に潮を足し」(18・上)で食べている。その米も少なくなつたところには、それぞれに分配し、各人が時折生でかじるといふ状況になる。その後は、船に付着した藤壺や俵藻、時折捕まえることが出来た「青鯽」(19・下)なども口にする。「信仰する處の神」⁽¹⁾(19・下)である海亀さえも仕方なく捉え食べようと試みたりもしている。救出直後、前述のように船長からワインを振る舞われ「今一杯呑申度」(24・上)とせがんでいる。餓えと渇きで瀕死の状態だったから無理もない。

体力を回復し、船上生活に次第に慣れ始めてからも食物に関する目撃談がよく登場する。食物から「異国」に対する偏見が生まれることがよくあるが、長者丸の乗組員達は極限状態を生き抜いてきたからであらうか、ほとんど抵抗なく「異国」の食べ物を受け入れ、それを賞味するまでになっている。

救出当日、特別にワインと、砂糖をかけた米の粥を振る舞ってもらつた漂流民達は、翌日からの食事に關して次のような証言を残している。

其翌日より粥を半合ばかり、四五杯宛、朝晝夕三度くれ申候。外に麥團子やうのものを(これを『ブライル』と申候)かねの皿に盛出し候。此分は心の儘に食し申事に候。七八日過候後は「ケツカル」の食事方と同様に、粥并「ブライル」(麥餅)外に塩漬の牛、家猪類の肉を煮てくれ、四五日毎に家猪鶏等の生肉、または芋などもくれ申候。(25・下、26・上)

捕鯨船に限らず、当時の船での食事には悪評がついてまわっていた。端的に言えば「まづいし、はつきり言つてむかむかする」⁽²⁾様なものだった。船員達が残した個人的記録やその他の航海記、あるいは船を舞台にした小説などで、不平不満の集中するのが食事の問題である。それは、栄養的に片寄つた単調なメニューと雑な調理法で特長づけられる。当時の捕鯨船にはコックが乗り組んでいたが、もちろん専門家というわけではなく⁽³⁾、「生で出したほうがまだ食べやすい」⁽⁴⁾と

いった状態がほとんどだったようだ。一八四五年、四年にわたる太平洋一帯の調査を終え膨大な報告書を上梓した米国海軍の Charles Wilkes は、その中でこうした捕鯨船での待遇のひどさに関して警告を発している⁽⁵⁾。船の食事の劣悪さは大航海以来の伝統のようなものであり⁽⁶⁾、捕鯨船も例外ではなかった。捕鯨船で食事に関して心配りが行き届くようになるのは、皮肉にも、捕鯨産業が衰退の坂を転げ落ちてゆく一九世紀後半を待たなければならない⁽⁷⁾。

食事の中心になるのは塩漬肉、塩漬豚肉で、salt horse あるいは salt junk (塩漬のクズ) と呼ばれていた。これは一六世紀の大航海以来の伝統的船の食糧である。一八三一年、Sag Harbor を出港した捕鯨船 Nimrod 号は、三〇樽の塩漬肉、三〇樽の塩漬豚肉を積み込んでいる⁽⁸⁾。二年ないし四年に及ぶ捕鯨航海のうちに塩漬肉の品質は落ち、腐敗同然のものを食べることも稀ではなかった。またこの塩漬肉中心の片寄った食事は、大航海以来多くの船乗りの命を奪った「壊血病」の原因でもあった。ビタミンCの欠乏から起

こるこの病気は、一九世紀のビタミンC発見まで、海的环境そのものが原因と考えられていた⁽⁹⁾。ただ、柑橘類や「スカーヴィ・グラス」と呼ばれる植物が特效薬であることは一六世紀辺りから経験的に気づかれていた⁽¹⁰⁾。一七世紀、新大陸に渡った移民達の必需品の中には「レモン・ジュース」が挙げられている⁽¹¹⁾。ただ高価なものであり、経済的に余裕のない人達は偽物の「レモン・ジュース」を買わされた⁽¹²⁾。捕鯨船ではこの時期から徐々にジャガイモを積み込むようになり、壊血病の発病率は減少したようだ⁽¹³⁾。

七、八日後に他の船乗り達と同じ食事になったとき、長者丸の乗組員が口にしたのは、この悪名高い塩漬肉だった。この塩漬肉を「牛の乳汁等種々の品を入れ煮申候」(29・上)とあるが、牛乳は捕鯨船にない食品の一つだったので、ここは記憶違いかも知れない。

「ブライル」に「麥餅」と註を付けているが、bread の事だろう。『番談』では「ブライデン」となっている。「東洋文庫」で室賀・矢守両氏も「パン」と註を付けている。船舶保存用に堅く焼いた一種のパンで

あり、塩漬肉に次ぐ船の主要な食糧である。ビスケット状になっているので sea biscuit と呼ばれる。前出の Nimrod 号は六〇〇〇ポンドを積み込んでいた⁹⁴⁾。その形や大きさに関しては、「大き三四寸厚さ六七分計も有之、麥團子のやう成物に候。堅く候へ共、砂糖を入れたる湯或は茶にひたし候へば、和らかなり、味わひよろしく候」(28・下、29・上)と述べている。確かに堅いものだったので hardack と呼ばれる。上級船員はこれ以外に普通の軟らかなパン (soft bread) を食べる⁹⁵⁾ともある。

パンは普通「野菜スープ」のような薄い茶またはコーヒーに漬け軟らかくして食べる。茶またはコーヒーには砂糖を入れる。砂糖黍からつくったモラスというものでこれは全員に配給される。『著談』には「砂糖湯ニ混和スレハ三倍容器トナル」(273・下)とある。ただこの食べ方には別の意味もあった。hardack には長期間保存しているうちに虫がつくことが多かった。パンを茶またはコーヒーに漬けると虫が這い出してくる。それをすくい取り食べるのである。この sea

biscuit も船乗り達の不平の的だった⁹⁶⁾。ただ、長者丸の乗組員達は「軟らかになり味わいよろしく候」と褒め、『著談』の次郎吉も「味極テ甘美ナリ」(273・下)としているのは興味深い。大きさ、形に関しても記述は正確である。

七、八日後には『ケツカル』の食事方と同様とある。捕鯨船では高級船員と普通船員の食事には差がつけられていた。船長や航海士にはなにか別のものが一品ついたり、貴重品の砂糖やバターがついた。平水夫達はバターなしで、砂糖の代わりに安い砂糖蜜 (molasses) が配給された。コーヒーや茶も、この砂糖蜜で甘味を付けた。典型的な一日の、職階別食事の例を挙げておく。

朝食 (午前7時)

Captain/Officer

Salt Horse (塩漬肉)

Soft Bread (軟らかなパン)

Potato Hush (ハンシュ・ポテト)

Butter

	Coffee
	Sugar
Boatsteerwr	同右
	ただし、Butter は無し。
	Sugar の代わりに安ら、Molasses
Crew	Boatsteerer と同じ。
	ただし、Soft Bread の代わり
	Hardack
昼食 (正午)	
Caotain/Officer	Salt Horse (Beef or Pork)
	Hardack
	Heavy Dessert
Boatsteerer	Salt Horse (Beef or Pork)
	Hardack
Crew	Boatsteerer と同じ
夕食 (午後四時)	
Captain/Officer	Salt Horse

	Soft Bread
	Butter
	Tea or Coffee
	Sugar
	Pie or Hush
Boatsteerer	同上
	ただし、バターと砂糖は無し。
Crew	Salt Horse
	Hardack
	Tea or Coffee ☞

『時規物語』巻之九の「言語対照表」には、高級船員用の砂糖を「ショーカー」、平水夫用の黍砂糖を「ムラシシ」としている。もちろんそれぞれ、sugar、molasses に対応する。

以上が捕鯨船の基本的な食事であり、長者丸乗組員も同じような食事をしていたと考えられる。ただし、捕鯨船では、変化をもたせるために、一週間の日変わりメニューを設けておくのが通例だった。例えば、月

曜・豆、火曜・米、水曜・ポテト、木曜・ダフ（後述）、金曜・米、土曜・鰯等である¹⁸⁾。船によってこのメニューは固定されることが多いので、料理の名が週の呼び名になることもあった¹⁹⁾。「四五日ごとに家猪鶏等の生肉、または芋などもくれ申候」とあるのは、この日変わりメニューを指していると思われる。ただ、後述するように長者丸の乗組員は、上級船員用の居住区で暮らしていたと思われるので、生肉などは特別配給品の可能性もある。「菜は玉子」（29・上）という証言があるが、「玉子」は高級船員達の贅沢品の一つだったからだ²⁰⁾。

長者丸の乗組員達は日変わりメニューに関してこんな証言を残している。

「ダーフ」（麥餅）と申物有之候。これは小麥の粉を水にて和らかにこね、布の袋へ入れゆで候へば、かたまり候を取出し、小口ぎりにして、砂糖蜜をかけて食し申候。又最初に玉子砂糖を入れ、こね申事も有之候。「ポリン」（麥餅）と申すは、

小麥の粉をよくこね、うすく平めに押のばし、夫へ砂糖漬けの葡萄、杏などを入れ、よく包み、指渡し七八寸計のまんじうのごとくにして蒸焼にし、切て食し申候。（29・上）

「ダーフ」に関しては、室賀・矢守両氏が、「ダフは dough（生パン）であるが、こゝでは doughboy（煮団子）の略であろうと思われる」²¹⁾と註を付けてる。「ダーフ」は通常 duff と綴られる食品で、doughboy とよく似ているが別のものである。

duff の作り方は証言どおりで、小麦粉にラード、イースト、細かく刻んだ塩漬豚肉の脂身を入れ、真水と塩水半々にしたものを加えてよく捏ね、団子状に丸めて塩水の中でゆがき、火が通ったところで取り出し、黍砂糖蜜（モラス）を添えて食べる。doughboy は sea pie とも呼ばれ、骨付きのイルカ肉等を小麦粉で包み、スープで煮て食べる。²²⁾『蕃談』では、「江豚（イルカ）ハ少ク食フ」（273・下）とこのイルカ食を認めている。当時の捕鯨船ではイルカを時々遊びとして捕え、

食べていた。一八五八年、夫の指揮する捕鯨船に乗り組んだ Mary Chipman Lawrence はその日記に、イルカを捕まえフライとソーセージにして食べたあと、皮脂からは油を絞ったと記している。彼女はこの御馳走を楽しみにしていたようだ²³⁾。イルカを食べる記事は一七世紀初期のアメリカ移民船記録にも登場する²⁴⁾。イルカを食べることは特に船の生活では特別変わったことではなかったように思われる。イルカは確かに比較的捕まえやすい新鮮な蛋白質源であり、新鮮な食品が少ない長期の航海では、当然一つの代替品となったはずだ²⁵⁾。捕鯨船の食事で不思議なのが鯨をあまり食べないことである。長者丸の乗組員達もそのことが不思議だったらしい。『著談』には「米ノ鰵肉ヲ擲棄シテ、顧ミス。客等可惜ト云フ。海ニドリテ取噉ントス」(273・上)とある。もったいないから船からおいて取ろうとしたのである。捕鯨船員達はそれを押しとどめ、鯨の肉には毒があると言ったと、『著談』は伝えている。長者丸の乗組員達が捕鯨船で鯨肉を食べたかどうかはわからない。ただ、彼らには日本で食べた鯨の肉の記憶

があったのだろう。能登半島に囲まれた富山湾一帯は江戸時代、突捕式小型捕鯨が行なわれていた形跡がある²⁶⁾。彼らは時には生の肉や、塩漬にした鯨肉を食べることがあったかもしれない。鯨は伝統的に「魚」であり「肉食」には当たらなかったからだ。たとえ郷里で食べたことがなかったとしても、北前船が立ち寄る九州や大阪で食べる機会があったはずだ²⁷⁾。文化一〇年(一八一三) 御前崎沖合で遭難、二年近い太平洋上漂流の末、アメリカ捕鯨船に救出された尾張名古屋の督乗丸の記録『船長日記』には、救出時にだされた食べ物に「くじらの油身のやうなるもの一切」²⁸⁾とあり、日本で鯨の脂身を食べていたことを偲ばせている。

一九世紀のアメリカ捕鯨船はほとんどの鯨肉を海に放棄したようだが、全く食べないということでもなかった。例えば一八四〇年代からベーリング海で北極背美鯨を捕り始めると、liver と呼ばれる尾の部分は特に切り分け、食品として珍重した²⁹⁾。ジャガイモとこの鯨肉のおかげで、壊血病が減ったとする研究者もいる³⁰⁾。第一次世界大戦前後アメリカは大量の鯨を食

糧として消費していたことを考えると、なぜ捕鯨船が鯨を食べなかったかうまく説明できない。背美鯨は「美味」な鯨として有名であり、一九世紀の捕鯨の主力だった抹香鯨はあまりうまくなかったということも原因の一つかもしれないが、これももうひとつ説得力がない。一六世紀の近代帆船捕鯨以前はヨーロッパ各地で鯨肉を食べる習慣が確認される。その後船足が延び、かさだかい肉から油へ目的が移行してゆく。鯨油は食用ではなく、主に産業用に消費されて行くところから、鯨は非食用の動物という習慣的考えが出来たのではないだろうか。

「ボリン」は pudding を指す。いわゆる pudding pie で、前述のメニューで pie とあるものだ。多くの場合、高級船員用の特別食となる。そのほか漂流民の記述にはないが、捕鯨船料理の有名なものに lobsouse がある⁸⁰。細かく砕いた hardback と塩漬肉に、胡椒を振りかけ水を加えてとろとろになるまで煮た一種のシチューである。こうしたものは日変わりメニューとして定期的にだされる場合と、気分転換のため特別料理

として不定期にだされる場合があった。

捕鯨船では生鮮食糧が最も不足した。数ヶ月に一度の割合で太平洋上に浮かぶ島々に寄港し生鮮食糧を補給するが、それも瞬く間に尽きた。生鮮食糧の不足は壞血病の原因でもあった。野菜に関しては一九世紀にジャガイモが積み込まれることになり、多少の待遇改善があった。熱帯の果物も役にたった。長者丸の乗組員達は「仏手柑」(29・上)を食べたと口述している。James Loper 号が長者丸の遭遇する前、一八三九年三月にはタヒチに寄港している⁸¹。その後さらにもう一度補給をした形跡が見られるので、この仏手柑はタヒチより西の南太平洋のどこかの島から運ばれ、長者丸の乗組員達の咽を潤した可能性がある。

動物性の生鮮食糧に関しては次の記述がある。

又食料に家猪鶏を畜置候。ぶたに餌の宛行おそき時は、船中の品を歯がけ候ゆゑ、釘貫にて前歯を抜きおき申候。親家猪貳十四計も畜有之候処、毎

度子をうみ申候。晝は矢倉へ出し置き、夜中は囲いの内へ入、鶏は籠に飼置申候。(27・下)

捕鯨船ではこのように豚や鶏を飼い、時々屠殺しては食料にしていた⁸²⁾。『蕃談』には足をつかんで咽を刺すという豚の屠殺方法と、豚の丸焼き料理が紹介されている(274・上)。野菜を詰め、油を塗ったあと丸焼きにし、「鹽醬等ヲ調シ啖フ。脆美名ケ難シ」(274・上)と絶賛している。長者丸の乗組員達は、故国で豚肉を食べたことがあったのだろうか。江戸時代後期の人々の肉食習慣についてはここで議論する能力はないが、少なくとも猪肉は公認されていた。もちろん猪ではなく「山鯨」という名で食べさせるところが多かった。長者丸の乗組員は少なくとも肉食に対する嫌悪感を見せたことはない。豚と並んで鶏も一般的な家畜だった。鶏の卵は船長用のことが多かった。前述のように長者丸の乗組員達はこの卵を支給されている。

捕鯨船は太平洋の島々に立ち寄りながら、豚や山羊や鶏を入手していった。一八三〇年代、ハワイからの

入植で農業が始まる小笠原諸島でも、豚などをさかんに供給している⁸³⁾。また野生の動物も捕まえることがあった。捕鯨場でもあり、補給基地でもあったガラパゴス諸島では、いわゆる象ガメが大量に捕獲され、船に積み込まれた。餌、水無しで長期間生きている象ガメは、捕鯨船上で放たれ、貴重な蛋白源となった。数百頭の象ガメを積み込むことはあったという。メルヴィルは捕鯨船場の象ガメを印象的に描いた作品を残している⁸⁴⁾。一八四四年、小笠原に寄港した *Obed Cathcart* 率いる捕鯨船 *Emerald* 号(三五九トン・*Nantucket*)も、さかんに海亀を捕まえようとしている⁸⁵⁾。

食事は船長と *Mate* がまず *Officers Cabin* (士官室)とよばれる船尾樓の部屋でとる。その後同じ部屋で詰手 (*Boatsteeren*) が食事をとる。平水夫達は船首樓 (*フォクスル* = *Forecastle* と呼ばれ、船首甲板下にある平水夫の居住区。不衛生なことで悪名が高い)か、甲板の上で食事をとる。晴れているかぎり甲板で食べることが多かったようだ。士官室では皿、カップ、ナイフ、フォーク、スプーンを使う。船首樓、あるいは

甲板では、塩漬肉とハードタックは、桶(Ki)あるいは(Ku)に入れられ、茶またはコーヒーはバケツで出される。各自桶から争って取り、自前の真鍮製の皿とナイフ、フォーク、スプーンを使って、しゃがみ込んで食事をする。使ったあとの食器は洗わず、寝床上の網棚に片付けられ、「あとはゴキブリが掃除をする」。⁹⁰船長者丸の乗組員達は、「いづれも『ケツカル』部屋邊に居申候」(26・下)と言っているように、高級船員居住地区で生活した様子で、この劣悪な平水夫の生活は経験しなかったのではないだろうか。やはり、特別な「配慮」のもとに暮らしてたと考えられる。食事もおそらく士官室で、鋤手が食べたあと取ったのではないだろうか。

救出当日飲ませてもらい、「もういっぱい」とせがんでみせた酒に関してはどうかろう。「巻之九」の言語対照表には、酒と葡萄酒両方に「ラーム」という「亜墨利加語」を充てている。『蕃談』には『ラウムワイナ』酒ヲ上等トス(273・上)とある。「焼酎」には「スペリスベル」を充て、「魯西亜語」としている。

おそらく記憶の混乱がある。「ラーム」はラム酒、「ラウムワイナ」はワインの一種、「スペリスベル」はスピリッツのことだろう。

一九世紀始めの捕鯨船はラム酒とウイスキーを中心に酒を積み込み、毎日船員に決まった量を配給していた。普通は水とラム酒を割ったもの(これを *log* と呼ぶ)だった。船長や高級船員達には特別にワインやビールが積み込まれていた。一八三〇年代から禁酒運動がさかんになるにつれて、酒類を積込むことは序々に減ったが、それでも酒が船に入り込むのは避けられなかった。船長にとって洋上で捕鯨船と合ったときや、太平洋の島々で首長達をもてなすとき酒は不可欠だった。船員達も港々でこっそり酒を持ち込んだ。

禁酒運動にもかかわらず、捕鯨船によって酒が例えばイスラット達にもたらされ、彼らの健康を損ない文化的基盤を破壊したという説があるが、最近では、酒を大量に持ち込んだのは捕鯨船というよりむしろ交易船だという説が有力になっている⁹¹。ただ捕鯨船の果たした文化史的側面研究はまだほとんど手着かずといふこ

ろで、今後さらに調査する必要がある。いずれにしても長者丸の乗組員達は救出直後、客官太洋の特別ワインを振る舞ってもらったのだらう。それもおそらく高級品だったマデイラ辺りのポート・ワインだったのでないだろうか。日本人漂流民達は日常生活のレヴェルから、寛容の精神に満ちた無私の援助を受けていた。

註

(1) 調査中

(2) Elmo Paul Hohman, *The American Whaleman ; A*

Study of Life and Labor in the Whaling Industry

(Longmans, New York, 1928), P.130. アメリカ捕鯨産業の

研究では、著名な出来事を追う事件史や、産業構造を記述する経済史的なものが多く、いわゆる社会史的研究は少ない。捕鯨船の日常生活に関しては当時の捕鯨に関する書物や個人的日記、あるいは小説などに散見されるが、体系的な研究はほとんどないと言ってよい。同書はその中で特に労働条件や日常生活に焦点を絞った研究書で、現在でも高い価値を持つ。本論では以降 EPH と略記する。その他捕鯨産業の社会史的研究として W. R. Palmer, *The Whaling*

Port Of Sag Harbor (Columbia University, 1959), また、

捕鯨船を含む一九世紀全般の船員生活に関しても、Margaret Scott Creighton, *The Private Life Of Jack*

Tar : Sailors at Sea in the Nineteenth Century (Boston University, 1985) を挙げておく。

食事の不美味さに関しては、Herman Melville, *Typee*

(John Murry: London, 1846) にも印象的な場面が描かれて

いるが、興味深いことに逆の証言も残っている。一八三三

年から一八三六年にかけて捕鯨船に乗り組んだ Frederick

Debell Bennett は、その著書 *Narrative of a Whaling*

Voyage Round the Globe : From the Year 1833 to

1836 (Richar Bentrey : London, 1840) vol. 1, p. 189 で、

ビトケン島をでた後しばらくの間、新鮮な肉や果物とい

う食事が続いたとき、塩漬肉中心の本来の食事に戻して欲

しいという要望が船員のなかから挙がったことを記してい

る。Bennett は、船員達が塩漬肉の方が健康を維持するの

に適していると考えていると、観察している。

(3) W. R. Palmer, *ibid.*, pp. 170-171. コックは素人が多

かった。捕鯨作業に向かないと判断されたものが食事係を任された。給料は船員の中でもっとも低く、一八四七年の数値によると一六〇レイ（航海の総収入の一六〇分の一ということ）となっている (EPH, p. 231)。新米船員で一、二五から一五〇レイだったから、捕鯨船ではもっとも経済効率の悪い船員と見做されていたわけである。

(4) EPH, p. 130.

(5) Charles Wilkes, *Narrative of the United States*

Exploring Expedition during the Years 1838, 1839,

1840, 1841, 1842 (Philadelphia, 1845) vol. v, pp.

- 500—502. Wilkes は、捕鯨船のすべての労働条件が間違っていることを指摘し、とりわけ船員の健康のため新鮮な食料を配給することを進めている。この大著は、頂点をむかえつつあったアメリカ捕鯨産業と密接な関係を持つもので、太平洋、インド洋、大西洋一帯の鯨資源と海流の関係を丹念に調べたものとしても価値がある。この意義に関しては拙論 'Whalers at the Vanguard of the Anglo-American Expansionism' [*Proceedings of International Forum For Studies on the Pacific Rim Region*, (The University of Nagoya Press, 1990)] pp. 127—149 あるいは同じく拙論「ケープ・ホーンと捕鯨」[『環太平洋圏における文化的・社会的構造に関する研究』(名古屋大学環太平洋問題研究会、平成二年)二六一—二八三頁参照]。
- (6) 大航海時代の船員の日常生活については不明の点が多い。当時の社会海事的研究でもっとも優れたもののひとつとして J. H. Parry, *The Age of Reconnaissance: Discovery, Exploration and Settlement 1450 to 1650* (University of Carolina Press, 1981) Part I Chapter iv を挙げておく。
- (7) Kenneth J. Carpenter, *The History of Scurvy and vitamin C* (Cambridge University Press, 1986) p. 10 によると、一八四〇年代から捕鯨船に新鮮な食料を積むよう警告が発せられはじめている。しかし、状況は、ほとんど改善されず、一八七年代の北極圏捕鯨時代にも依然として生鮮食料不足から来る壊血病が後を絶たなかったことが報告されている。
- (8) W. R. Palmer, *ibid.*, p. 157. EPH p. 325 には一八四四年当時の捕鯨船の積み荷リストがまとめられている。それによると牛肉と豚肉合わせて二四〇バーレルが挙げられている。このときの費用が二〇四〇ドルで、装備全体の費用が五〇九九ドルとなっているから、ほぼ四％に当たる。
- (9) Kenneth J. Carpenter, *ibid.* chapters 1, 2 等を参照。海の環境そのものが壊血病を引き起こすと考えられていたから、もっとも手取り早い治療方法は病人を上陸させることだった。
- (10) ライムやレモンあるいはスカウヴィ・グラスと呼ばれる草が壊血病に効果があることは多くの航海者が報告している。例えば Captain Drake は一五七七から九年にかけての航海で、スカウヴィ・グラス(おそらくはアブラナ科トモシリンウ)に言及し、東インド会社はレモン水を積むことを指示している(一六〇七年)。
- (11) 十七世紀初頭には Sir Hugh Platt がレモンジュースの瓶詰め(あるいは缶詰)を発明したことが Kenneth J. Carpenter, *ibid.* p. 27—28 に挙がっている。Captain John Smith, *Accidence* (London, 1626) p. 804 では、ニューイングランドへの移民に対しレモンを携帯することを奨励している。
- (12) David Cressy, *Coming Over* (Cambridge University Press, 1987) p. 171.
- (13) Kenneth J. Carpenter, *ibid.* p. 100.
- (14) EPH, p. 325 によると、一八四四年当時のマッコウ捕鯨

船は平均して二二〇バーレルの小麦粉を積み込んでいた。おそらくその半分くらいはすでに焼いた sea biscuit だったと考えられる。

- (15) EPH, pp. 131-132. おそらく保存したものではなく、その都度ロックスが焼いたものである。

- (16) EPH, p. 133.

- (17) EPH, pp. 130-131.

- (18) EPH, p. 131.

- (19) EPH, p. 131.

- (20) 高級船員用の食料として、バター、チーズ、干葡萄、乾燥林檎、砂糖、チョコレート、コーヒー、胡椒、マスタード、ジンジャー、ブランドイ、ワイン、などが挙げられる。また一八五六年から一八六〇年にかけて夫である捕鯨船長 Samuel Lawrence に従って七回の捕鯨航海に従った Mary Lawrence は、一八五六年一月二十五日のクリスマスに、ローストチキン、ポテト、カブ、タマネギ、克蘭ベリンチュール、ビートの漬物、キュウリ、プラム入りダフを食べている。これも特別配給だったが、これはまれなケースである。

玉子も貴重な生鮮食料品だったようだ。William M. Davis, *Nimrod of the Sea ; or The American Whaleman* (Boston, 1926) pp. 282-283 には、玉子が特別配給品だったことを茶化す話が描かれている。同書の初版は一八七四年に出版されており、出版当時人気を博したものである。著者は実際捕鯨の黄金時代を経験し、それに基づいて

忠実に捕鯨産業の日常を描き、しかも興味深い読み物に仕立てている。捕鯨産業の社会史を研究する際の重要な資料のひとつと言える。

- (21) 東洋文庫三八『蕃談』平凡社、一九七八年、二〇七頁。
(22) W. R. Palmer, *ibid.*, p. 172.

- (23) Stanton Garner ed., *The Captain's Best Mate ; The Journal of Mary Chipman Lawrence on the Whaler Addison, 1856-1860* (Brown University Press, 1966) 参照。例えば彼女は一八五六年一月二八日の日記にこう記している。

This morning caught a porpoise. The meat looks very much like beef. The oil is contained in the skin, which they will boil out tomorrow. Had some of the meat fried for dinner and some made into sausage cakes for supper. They are as nice as pork sausages.

- (24) David Cressy, *ibid.*, p. 174. 一七世紀の移民船ではイルカを翌年一月二六日には再びイルカを捕まえ、二月一日にはイルカを捕まえようとしたが失敗している。この日イルカを捕まえる騒ぎの最中鶏が海に落ち、彼女は「可愛そうなことをした。船の上の生き物みんなに対し、私は愛情を感じている」と書いている。二月一日には再びイルカを捕えている。

David Cressy, *ibid.*, p. 174. 一七世紀の移民船ではイルカを時々捕えていたが、フライにすると「ベーコン」のようだという証言が残っている。Richard Mahler はイルカ肉を大喜びで食べ、その解体の様子を「豚の屠殺」のようだと

述べる。イルカの解体は多くの移民にとって一種の娯楽のように捉えられていたようだ。

- (25) イルカを食べる習慣は全世界に散らばって、現在も存在している。四〇〇年の伝統を持つデンマーク領フェロー諸島のゴンドウ漁、エスキモーのシロイルカ漁、あるいは日本の太地を中心とした追い込み漁などがあるが、長崎県五島では打ち上がったイルカを食用として一部を利用することがある。また、ニュー・ファウンドランドではレストランのメニューにイルカステーキが載る。アメリカ捕鯨船も少なくとも一八六〇年代まではイルカを何の抵抗もなく食べていた。

- (26) 寛政から文化年間にかけて成立したと考えられている大槻清準『鯨史稿』(熊野太地浦捕鯨史編纂委員会編『熊野太地浦捕鯨史』平凡社、昭和四四年一八八頁)には、「北陸道能登州 小木浦 此処ニ鯨捕ル者アリ、然レドモ南海西海ノ如ク組方ノ法備リタル事ニハ非ズ」とあり、捕鯨が行なわれていたらしい事を伝えている。この件に関しては筆者も現在調査中である。

- (27) 江戸時代における鯨肉食の習慣は関西、九州から始まり、徐々に東へと広がったものらしい。江戸時代には鯨肉の調理法が発達する。『本朝食鑑』には捕獲方法から、各部位の食し方が記述され、また『鯨肉調味方』には、約一二〇種類にのぼる料理法が描かれている。

- (28) 日本庶民生活史料集成第五巻『松長日記』五一八頁。尾張地方は知多半島を中心にして突捕り式捕鯨が行なわれて

いた。日本でも最古の組織的突捕り捕鯨だった可能性がある。松平君山『張州府志』、内藤東甫『張州雜志』、あるいは『尾張名所圖會』などには知多半島師崎の捕鯨が描かれている。前出の『鯨史稿』には「尾張ニ鯨方アリテ獲物ノ有無ニ拘ワラズ不断海上ヲ乗廻リ」とあり、尾張藩船手奉行千賀氏に率いられた水軍をかねた鯨方の存在が報告されている。獲物は少しずつ減っていたのだろうが、それ以外にも紀州からの鯨肉の流入もあり、尾張藩では鯨は珍しい食べ物と言うわけではなかったと考えられる。なお、尾張藩の捕鯨に関しては郷土史家木原克之氏の教えを頂いた。氏の『知多半島を読むー海・山・いきもの・村の歴史ー』愛知県郷土史料刊行会にはおおいに教えられた。感謝したい。

- (29) John R. Brockstoe, *Whale, Ice, & Man: The History of Whaling in the Western Arctic* (University of Washington Press, 1986) p. 87 には「一八五〇年代から本格化するベーリング海での北極海捕鯨で、解体した後、鯨の尾の部分から六〇〇ポンドほどのテンダーロインを切り取り食用にしたとの報告が記されている。EPH, p. 132 は少数の捕鯨者が鯨のステーキを賞味したことを記している。Melville は、その作品の中で二章をさき「美味としての鯨」に言及する。

- (30) W. R. Palmer, *ibid.*, p. 172.

- (31) James Loper 号の航海日誌のマイクロフイルムのクレジツ
「は」 Old Dartmouth Historical Society Whaling

Museum : Reference No. 1010, PMB No. 958 : 128pages となっており、一九八一年一月二三日に撮影されたものである。この航海日誌に関しては、Old Dartmouth Historical Society Whaling Museum の Virginia M. Adams 氏からすべてを利用し引用してもよいという許可を頂いた。本論ではこの航海日誌を JLLB と略記する。判読はすべて筆者が行なったため、判読に誤りがあればすべて筆者の責任である。

JLLB に拠れば、James Loper 号は一八三九年三月二一日午前一一時にタヒチを目視し、二三日にパイロットを雇い、午前一一時にタヒチに錨を降ろしている。同船は以降四月四日の出港までは三週間タヒチに停泊している。タヒチ出帆後船は西北西に進路をとったが、その後の位置観測の記載がしばしば欠落するため詳しい位置は特定できない。しかし、途中どこかの島へ上陸した形跡が次のような形で航海日誌に記されている。四月八日にはボートが陸へ向かい、九日にはそのボートが帰ってきている。その地点は南緯一七度、西経一五三度である。四月一四日もボートが陸へ向かい、翌日戻り、一五日にはもう一度ボートが陸へ向かっている。明らかにこれは交易があったといえる。一六日にはこのボートも戻っている。四月に四日から五月一八日までの航海日誌は残っておらず、この間、交易があったかどうかは判断できない。その後、長者丸を救出しハワイにつくまで、島に立ち寄った形跡はない。

(32) 鶏、鵝、豚などを船に積み込み甲板で飼うのは普通のこ

とだった。EPI, p. 325 のリストには、Duck Heavy 60pieces, Duck Ligh 36pieces が挙がっている。

(33) 大久保利兼序 大熊良一著『小笠原諸島異国船来航記』

近藤出版、昭和六〇年、九七頁には小笠原の入植者が来航する船舶に食料を売る際の値段が記されている。豚に関しては大きさによってその都度値段を交渉したらしい。前出の F. D. Bennett, vol. 1, p. 86 にも豚を積み込む記述がある。Jaems Loper 号もタヒチで豚を入手したのかもしれない。

(34) Herman Melville, "Encantadas : or the Enchanted Isles".

(35) Emerald 号の航海日誌に関しては Nantucket Historical Associations より前文を利用し引用する許可を頂いた。Emerald 号の一八四四年六月二三日の航海日誌は次のように判読できる。

Monday the 24 Commences with strong wind & thick rainy weather at 2 pm spoke the Charcls Frederick of New Bedford Capt Allen 24 Months out with 1300 bbls sperm Oil at half past (6) pm closte (sic) reefed the Topsails (hended) the Foresail jib and spunks wind S by W standing to W by S lowed for a (****) moderate threwe(sic) the night at 6 am pleasant went in with the boat at noon returned with the two bbls (****) & two turtle two boys absconded (****) the Boat James Brown & Samuel Mc Neal ends lying of (sic) & on

(36) EPH, p. 135 あることは W. R. Palmer, *ibid.*, p. 174 等を参照。

(37) John R. Bockstoe, *ibid.*, pp. 182-183 参照。

七 「この水目にしみ申候」―捕鯨船の日常生活

(衣・住篇) ―

漂流民たちは救出当日、とっておきの着物に着替えている。平四郎などは紋付を着、威儀を正して捕鯨船に乗り込んでいるが、数日後にはアメリカ風の衣類を与えられ、「異国人同様の姿」になっている⁽¹⁾。捕鯨船員の服装については漂流民達の証言と共に挿画が残っている。いずれもジャケット、ズボン、靴を身に付けて帽子を被っているのが特長である。一七世紀に大型帆船捕鯨がイギリスとオランダを中心にかしされてから多くの捕鯨図が描かれ、一八五〇年代からは写真も残っているが、捕鯨船員達は例外なく帽子を被っている⁽²⁾。帽子を被るのは当時の風俗でもあったが事故を防ぐ意味もあった。

捕鯨船員達は「乗船代理人」(Shipping Agent)を通

じて募集される。「代理人」は船主の一人であることが多い。船員は「代理人」が用意した契約書にサインを済せると、次は「仕立人」(Out Fitter)が経営する店で航海に必要な衣類や日用品を買い揃える。粗悪品に不当な高値を付けた場合が多いが、事情を知らない新米たちはここで衣類を揃えることが多かった。経験者は自前で、別の店で調達する。平均七〇から一〇〇ドルかかったようだ⁽³⁾。こうしてそろえた必需品は、通称 Donkey と呼ばれる船乗折 (Sea Chest) に詰め込まれる。その中には、針、糸、ボタン、鬚剃道具、食事用ナイフ、フォーク、スプーン、皿、作業用ナイフ、ベルト、石鹼、毛布、枕等と共に、安い衣料品が入っていた。典型的なものを挙げると、ジャケット二着、フロックコート一着、雨合羽一着、ズボン数本、シャツ、下着、靴下、靴などである。こうした品を「代理人」から購入するときは前借りで、航海終了後清算される事になっていた⁽⁴⁾。

長者丸の乗組員達は捕鯨船上では砥石を回す手伝いなどをしたようだが、その他は暇だったようで、船長

は見かねて声をかけている。

長持ようの内に多く貯候木綿を取出し、勝手に仕立着いたし候へと申鉢に色々手真似いたし候。それともいかゞと見合居候へども、後には切裁候て、彼等の着したる服の様にこしらへ着申候(26・下)

木綿を蓄えていた「長持様」のものは、Slop Chest と呼ばれる。衣類・布はもちろん、石鹼、煙草にいたる日用品の予備を入れておき、船員達には必要に応じて取り出す。一種の掛売りで、取出したものはすべて記帳され、これも航海の終了後清算される⁽⁵⁾。もちろんこれらの品々にも不当な値段が付けられていた。船員達は徹底的に搾取されるシステムのもとで労働に従事していた。船員の中には下船時に、収支がマイナスになるものもいた。一八四〇年代の帆船捕鯨黄金時代、食い詰めた徒手空拳の青年達にとって捕鯨船に乗り込むことは一つの選択だったが、平均給与は平船員で日

給三五セント、グリーンハンドと呼ばれる新米船員では一八セントという試算がある。これは当時の農場や工場の平均給与と比べて、よいどころか、むしろ悪いほうにはいる⁽⁶⁾。捕鯨業は経済的には決して有利な活動ではなかった。もちろん漂流民達はこの搾取のシステムからは除外されていた。過酷な労働条件で働く船員達を横目で見ながら、見よう見真似で洋服をこしらえ、着用したのである。

「住」に関しては救出直後の次の証言が残っている。

夜中七人の者共を船の艙へ連行、人々集りたる處に臥候様申候へ共、嬉しさの餘り眠り不申、咄などいたし居り申候。(24・下)

また船の生活にも慣れたころの証言は次のようになる。

船中にて夜中は水夫ども船の表に居候て、躍りなどいたし候へども、いづれも「ケツカル」部屋邊

に居申候故、間遠く足音も聞え不申程に候。(26
・下)

一般に船では舳(船首)甲板の下の部分が平船員の居住地区でフォクスル(Forecastle)と呼ばれる。このJames Loper号のようなShip型帆船では、前檣(Foremast)より前方に位置する。そこから、平船員の生活がBefore The Mastと呼ばれる事になる。フォクスルは主甲板の真下にあり、舳先が次第に狭くなるのに従ってカーブを描く空間で、その曲がった壁に沿って板製の二段ベッドがしつらえてある⁽⁷⁾。そこで自前の毛布を使って眠るのである。船の揺れが大きいときはハンモックを吊って眠った。『蕃談』には、「船ノ盪漾ヲ忌者ハ帆布ヲ長八九尺ニ截シ、首尾ニ木條ヲ擅シ、梁ノ鐵環ニ繩繫ス。形チ略鷄峙ニ類ス。之ニ褥ヲ布キ寢スレハ、懸空ニ爲ニ傾倒揺動セス」(283・上)とハンモックに言及し、図を添えている。

フォクスルでは入り口のハッチが唯一の通気孔であり、明り採りでもあった。ハッチは悪天候の時には閉

じられてしまうので、暗く、息苦しい空間になった。

ここに二十人前後の男達が閉じ込められていたのである。汗や体臭、煙草や食物の滓、古着や毛布の臭いが充満し、様々な言葉が飛び交い、口論や静いが頻繁に起こった⁽⁸⁾。薄暗いへやの墨には鼠の目が光り、壁にはゴキブリが蠢いていた。記録を残した多くの捕鯨者が異口同音にその不潔さ、不快さを指摘している。まさに悲劇的な空間だった。船員達は天候が許せばできるだけ甲板で過ごすことを好んだのも無理はない⁽⁹⁾。

高級船員達の居住区は前述のように、船の艦にあった。船尾のCabinは、操舵室でもあり捕鯨船の中樞だった。その下の「矢倉より榮繰のように廻り降り」たところの右舷側が船長室(Captain's Stateroom)で、寝室、執務室、休憩室を兼ね、トイレもついていた。ベッドは特殊な装置で船の揺れに対し水平を保てるようになっていた。ベッドそのものへ取付けたハンモックのようなものである。別にCaptain's Cabinと呼ばれる部屋もあり、客などを迎えるときに使った。ソファを備え付けた船さえあった⁽¹⁰⁾。一八四〇年代

から妻子を乗り組ませる船長もでてるが、数名の家族が暮らせる程度のスペースはあった¹⁰⁾。漂流民たちが最初にワインを振る舞われた場所はここだと推定できる。

メイトは左舷側に航海士室 (Mates Stateroom) を与えられていた。そこは航海士達の寝室兼執務室で、寝床と机がついていた。『蕃談』にはその図が付けられている。船長室よりは小さいが、それでも十分な広さがあった。この航海士室は食堂 (Mess Room) とつながっていた。食堂には固定されたテーブルがあり、船長、航海士、鉛手が食事を取った。食堂は航海士たちが集まるところなので、Mates Cabin とも呼ばれた¹¹⁾。船長室と航海士室の前方に Storage と呼ばれる空間がある。普通八つの寝棚仕込である。通風と採光の点では難点があったが、気を配ってさえいれば、十分快適な居住空間になった。ここが船では第三位のクラスのの鉛手、樽職人、大工、たちの部屋である¹²⁾。

漂流民たちはおそらく航海士室に寝起きすることを許されたのだろう。だから、フォクシルの馬鹿騒ぎは

気にならなかったのである。『蕃談』には、「官人ニ房ハ較寛裕ニシテ佳潔也」(283・上)と、高級船員たちの部屋が広く清潔だったことを伝えている。そこでは鍵もかかるし、机も明り採りもあった。次郎吉は「漂子ハ皆吏房ヲ受ケ是ニ居レリ」(283・上、284・上)と証言している。航海士用の部屋を貰ったというのである。

ただ航海室は七人が使うにはスペースが足りない。しかし、本論(一)で述べたように漂流民たちは四隻の捕鯨船に分乗してハワイへ向かっている¹³⁾。平四郎、金蔵、次郎吉の三名、八左衛門、七左衛門の二名、あとは六兵衛、太三郎は一人ずつだったので、それぞれの船が漂流民達に航海士室をあてがうことも可能だったろう。七名を分けたのは、快適な船旅をさせてやろうという配慮からかも知れない。いづれにしても漂流民達はそれぞれの船で、航海士達と同じ空間で寝起きし、お互いの寝息を聞きながらハワイまでの五か月間を過ごした。

捕鯨船の日課に関してはつぎの証言がある。

此船中には重立候者三人は、宵より夜明けまで臥り、其餘水夫共は晝夜三時代わりに休息いたし候（26・上）

捕鯨船にも他の商船や軍艦同様、いわゆる Watch and Watch というシステムがあった。これは二人の航海士をリーダーに乗組員を二グループに分け、交代で船上作業を行なうもので、一五、六世紀の大航海以来の伝統的なやり方である。捕鯨船では母港を出港した最初の日の午後四時、総員が甲板に集められ、二人の航海士がそれぞれ自分のグループに属する人員の名を読み上げる。船長、大工、鍛冶屋、コック、司厨長以外の全員が、一等航海士をリーダーとする Starboard Watch と、二等航海士をリーダーとする Larboard Watch の二グループに配属される。それぞれのグループは次のシフトで交代勤務につくる⁹⁹。

Starboard Watch

午後四時～午後六時＝二時間

午後八時～午前〇時＝四時間

午前四時～午前八時＝四時間
正午～午後四時＝四時間
計 十四時間

Larboard Watch

午後六時～午後八時＝二時間

午前〇時～午前4時＝四時間

午前八時～正午＝四時間

計 一〇時間¹⁰⁰

午後四時から午後八時の四時間は二時間ずつに分けられ、これを Dog Watch と呼ぶ。この四時間で二グループのシフトが入れ替わる。四時から六時の間に食事を取り、六時から八時はほとんどの乗組員にとって、一日でもっとも寛げる時間になる。歌を歌い、踊り、話に花が咲くのもこの時間帯である。非番のものは時には夜中まで浮かれ騒ぐことがあった。簡単な楽器が扱え、歌が歌えるものは Minstrel Boy と呼ばれ人気ものになった。虚実とり混ぜた大袈裟な話は Yarn と

呼ばれ、そんな話をすることを「糸紡ぎ」(Spin a Yarn)と言った。海の怪物やセントエルモの火、幽霊や海賊が登場する話だった。レスリングまがいのじゃれあいもあった。これは Sky Larking と呼ばれた⁹⁷⁾。

捕鯨船上でのパーティーについては Melville が印象的な場面を描いている⁹⁸⁾。賭博は船長が禁止する場面が多いが、こっそりやっていたのかもしれない。漂流民達は「船中にて骰子所持の者有之」(29・上)と語っている。

さて、漂流民が言う「重立候三人」とは、船長、一等航海士、二等航海士のことだ。しかし、このワッチ・システムでは航海士も共に夜中に起きて、四時間ごとの交替勤務につく。船長は別にして、航海士が「宵より夜明けまで臥る」ことはない。漂流民の記憶違いだろうか。

実は、今述べたワッチ・システムは、捕鯨場につくまでの航海中に使われるもので、捕鯨場についた後は別のワッチ・システムを使うことになっていた。捕鯨場につくと、三ないし四隻ある捕鯨ボートにそれぞれ

配置された四人の平水夫と鉦手の計五名が一グループを作り、午後六時から翌朝午前六時までを四時間づつの三交替、もしくは三時間づつの四交替制で勤務につき、その間船長と航海士は邪魔されることなく眠っていた⁹⁹⁾。昼間は総員が捕鯨に備えて待機する。漂流民が言及しているのはおそらくこの捕鯨場で捕鯨作業体制に入ったときのワッチ・システムである。James Loper 号は長者丸救出前後いわゆる「ジャパン・グラウンド」で本格的操業体制に入っていたのである。漂流民の証言はここでも異常に正確だ。

『蕃談』には船の朝の日課を「毎日朝起、衆夫一斉ニ力ヲ併セ、船上ヲ掃儼ス」(281・下)としている。航海時のシフトでは午前四時から午前八時のグループが船の清掃作業を行なう。『蕃談』の全員揃っての清掃は、操業体制の時のものだ。この観察も正確だ。

救出後三、四日経ったとき漂流民達は面白いことを経験している。

扱、此船に乗り移り候て三四日目に、盥を持出水

を七分目計入れ、行水をつかはせ候。その節總身へ髻附の様なものを（これは『メーロ』と申ものに候。歸国の後承候へば唐しゃぼんにて漢名石鹼と申由に候。）ぬりて洗うに、泡立て垢すきと申候。この水目にしみ申候所、目をふさぎ候様にをしえ申候。（26・上）

「メーロ」はロシア語の石鹼（MЫЛО）である。『蕃談』には『メル』羅、『ソップ』英の割注が付いている。

この行水を使って石鹼が目にしみた日は、救出から三日後の六月九日と考えられる。この日が日曜日だからだ。捕鯨船では日曜日ごとに一週間分の割当の水が配られ、髭を剃り、体を洗い、可能ならば新しい服に着替える。前述のように捕鯨船員達は自前の石鹼を持っていた。水がすくないため、捕鯨船では体を洗うことは贅沢の一つだった²⁰。James Loper 号の航海日誌によると、六月九日の日曜日は、心地良い南東の微風が吹く穏やかな一日だった。漂流民達は明るい南の

太陽が降り注ぐ甲板で裸になり、初めて使う石鹼に顔をしかめ、船員達は大声で笑いながら身振り手振りで目をつぶれと教える。珍しい客を迎えた James Loper 号は笑い声に包まれたのだろう。この目にしみる不思議な石鹼が実は、James Loper 号が追い求める巨大な鯨の油から出来ているということなど漂流民達には思いもよらなかったはずだ。

日曜日には探鯨用の見張り台に人員を配置することと、最低限の操船のための作業だけは行なうが、そのほかの作業は原則的には行なわなかった。日曜日は休息の日であり、船員達はそれぞれ自分の楽しみに時間を割くことが出来た。一八三〇年代くらいまでは、多くの船長が「安息日」を守っていたようだ。しかし、その日鯨を発見すると船長と船員の間には軋轢が生じることもあった。夫にしたがって捕鯨航海にでたある船長夫人は夫が「安息日」に捕鯨をしないことに対して、日記に愚痴を連ねている²¹。Melville はその作品の中で、鯨さえ発見すれば、必ずしも「安息日」を守る必要はなく、捕鯨を行なうことがむしろ神の御意に

添うことだと冗談っぽくかいている²³。James Loper 号の場合、六月六日の救出の日からハワイのヒロ(Hi-lo)に付くまで、幸か不幸か日曜日には鯨は発見できなかった。しかし、搾油(後述)等の作業は行なっている。一八五〇年、太平洋とベーリング海へ捕鯨航海にでた James F. Munger の残した貴重な日記には、日曜日に頻繁に出漁したことが記されている²⁴。

おそらく一八四〇年代が捕鯨船での宗教的規律が崩れる時期に当たっているのではないか。一八四三年創刊の禁酒運動宣伝新聞であるハワイの *Honolulu Friend* は頻繁に安息日を守ることを勧める記事を掲載している²⁵。捕鯨船ではその他の祝祭日はほとんど守られなかったようだ²⁶。

日曜日には読書をしたり、手紙や日記を認めるものもいた。しかし、もっとも一般的な娯楽は抹香鯨の歯や骨をナイフで削って作る細工物だった。これを *Scrimshaw* と呼ぶ²⁷。様々の彫像にこしらえたり、パイプやナイフの柄を作ったり、表面に細い線を刻みインクを擦り込んで図像を描いたりした。現在、アメリカ

の捕鯨博物館の多くは *Scrimshaw* のコレクションを持っており、展示品の中でも人気の高いものの一つとなっている。『著談』には「廣館ノ押替匣ハ兩眼ニシテ扁ナリ。其關鑰ハ邦俗ノ『ツキアケ』ナル者也。把鈕ハ鰐牙ニテ銼成ス」(279・下)とあり、ハワイの広東人商人の家の筆筒の把手に抹香鯨の細工物が使われていると記録している。

Wilmington and Liverpool 号に移された太三郎は船上の葬式の模様を記憶していた。

或時船中の者壹人帆柱至極かみの帆桁に上り候處、いかゞいたし候哉、船の真中へ落、礫など打たるやうにて其儘死し、片足の骨板に突立申候。これは朝五時頃の事に候。七時頃まで其儘にいたし置、それより帆木綿にて死骸を幾重にもまき、この巻留を縫ひかため、石を足の方へ付、「ポーシタ」屯人なにやら讀經いたし、足の方より海へ沈めさせ申候。(27・上)

櫓頭で作業中の船員が甲板へ落下し、死亡する。帆の高さは三〇メートル以上あったから、即死だろう。

脚が骨盤にめり込んでいた。数時間後葬儀が営まれる。

通常遺体は帆布で何重にも包み、それを縫い固める。

時には死霊が迷いでてこないように遺体の鼻を糸で縫

い付けることもある。迷信深い船員の中には、この死

霊の封じ込めには気を遣う者もいたようだ²⁸。ガラパ

ゴス諸島の有名な象ガメ（ガラバゴ）は、海で死ん

だ船員達の生まれ変わりという話も一般的だった。遺

体はさらに星条旗あるいは船旗でくるまれ、石などの

重しをつける。それから、簡単な祈りの言葉と共に海

に流す。船員の死は航海日誌では簡潔に記されるだけ

だが、個人的な日記や回想では感情を込めて記される

ことが多い²⁹。

軍艦では、埋葬が終わると、船長は死亡した船員の

遺品、特に衣類などを船上で競売に掛ける習慣があっ

たが、捕鯨船でも同じ習慣があったかどうか確認でき

なかった。棄船者の場合は競売があり、こうして集め

た金は保管され、航海終了後、前貸しやスロップ・

チェストの掛け売りの埋め合わせに使われた。

Melville は、軍艦の競売の習慣を皮肉を込めて作品の中で描いている³⁰。

捕鯨船における死亡事故の統計は船員はよく偽名で

乗船すること、また棄船が頻繁におきること、その都

度太平洋の港々で補充することなどから、正確なもの

がない。一八四三年から一八六二年までの二〇年間で

完全な記録が残っていると考えられる十五の航海から

の試算では、死亡率は三・三%という数字が上がって

いる。James Loper 号や Wilmington and Liverpool

号クラスでは、一航海で一名が死亡する可能性がある

ことになる。ちなみに同じサンプルで棄船率は二九・

二%である³¹。死亡率は捕鯨という危険な作業の割に

は低いと言える。

捕鯨船は故国を遥か離れた海域で同業船に合うこと

があった。本論(一)第四節で述べたとおり、James

Loper 号は六月六日の漂流民救出後ハワイに寄港する

までの五か月間に、七隻(延べ八隻)の捕鯨船に出

会っている。四節で詳述したとおり、それらはすべて

アメリカ船籍の捕鯨船である。そのほか国籍不明の船影を数隻目視している。捕鯨船同士が出会ったときの模様を漂流民達はこの回顧している。

右異國船出逢砌、忝丁計に成候へば、何やらん口にあて、遠方へ聲のとゞき候道具にて申合せ候。此以後も異國船折々見請申候。其砌いつも同様に「ルーペル」にて聲をかけ申候。若行過いたらぬ時は、ゆるやかに乗廻し、又は船を留め申候。總して船出逢候節は、跡より見掛候船、此方の船に近付候て、ひとまわりいたし候。また双方の船頭面談いたし候節は、年増の者の方へ来り候ゆゑ、此方よりは次役の者を挨拶に遣し候事のよし、いづれも作法の様に承り候。(24・下)

航海日誌では船同士が海上で出会った場合、三種類の表記の仕方がある。第一は目視する場合で、「目視」(Saw a Sail)と記す。第二番目は、近づいて声を掛け情報を交換する場合で、「声を掛けた」(Spoke)

と書く。第三が、お互いの船を訪問し交歓する場合で、「交歓した」(Gammed)と表記する。James Loper号の場合五か月間で、「目視」が二回(七月十四日/八月十六日)⁸⁰⁾、「声を掛けた」のが六回(六月十一日/六月十八日/七月五日/八月二隻/七月十三日/九月十三日/九月二十八日)⁸¹⁾、「交歓した」のが一回(九月十七日)⁸²⁾である。長者丸の乗組員達が言及しているのは「声を掛けた」場合と「交歓した」場合の作法についてだ。

「声を掛ける」時には、緯度・経度や鯨の情報を交換したり、本国の知らせを聞いたり、手紙を受け取ったり、託したりする。『蕃談』には船が出会った場合、必ず国籍や船籍を問う「漫爾ニ經過スル事ナシ」(283・上)とある。「交歓する」ことはGamと呼ばれる。特に親しい船同士が出会った場合、片方の船長が捕鯨ボートの乗組員と共に他の船に移り、船長の歓待を受ける。一方、一等航海士は船に留まり、代わりにやって来る航海士と乗組員を歓待する。歌や踊りがあり、話が交わられ、Duffなどの特別料理が振る舞われ

る。単調な捕鯨航海では生活に変化を付ける楽しみな機会だった。Melville は Gam のため相手の船へ乗り移るときの船長の滑稽な姿を描いている³⁰。

James Loper 号は九月十七日に、同じナンタケット船籍の Elizabeth Starbuck 号と交歓している。同船とは九月十三日に声を掛け合ったばかりだった。この船と James Loper 号の船主は共に同じ、ナンタケットの捕鯨の大立者 Levi Starbuck であり、おそらく Cathcart は船長の Alexander M. Chase と顔馴染みだったのだろう。またこの船は Cathcart が、一八三四年から二年十か月に渡り太平洋上で指揮を執り、二七〇ハバーレルという、彼の生涯で最も成功した捕鯨航海の時に指揮したなつかしい船でもあった³¹。

Elizabeth Starbuck 号が James Loper 号の航海日誌に顔を表すのはこの二回だけだが、ハワイの新聞 *Sandwich Island Mirror* の九月十五日号の記事には、Fama という船が太平洋上西経一六六度で八月十五日に Elizabeth Starbuck 号に出会い、そのときある船が日本船に出会い四名の日本人を救出した話を聞いて

たとある³²。おそらくこの日本人は長者丸の乗組員だと考えられるが、だとすれば少なくとも八月十五日以前に Elizabeth Starbuck 号は James Loper 号に出逢うか、あるいはそれ以前に James Loper 号に出会った船と出逢っていることになる。

James Loper 号は Elizabeth Starbuck 号より八か月遅れてナンタケットを出港している。従って Elizabeth Starbuck 号あての手紙を託されていたかも知れない。だとしたら十三日に手紙類は渡された可能性がある。十七日には八か月間のアメリカの知らせに花が咲いたことだろう。地点は北緯三〇度一九分、西経一六一度一五分。南東の方角には、夏の漁期を終えた捕鯨船が結集するハワイがあった。ハワイ寄港の時期についても話したかも知れない。数日後 James Loper 号は進路を南にとり一気にハワイへ向かっている。九月十七日は終日北北東の微風が吹き、頭上には南国の太陽が輝いていた。漂流民達は、珍しい客で俄然賑やかになった甲板を、他の乗組員同様うきうきしながら歩き回ったのだろう。

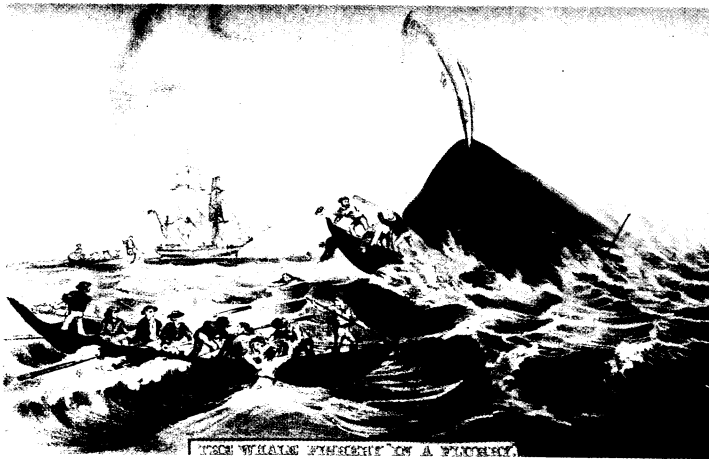
(1) 註

中浜萬次郎達も同様に救出後衣服を支給されている。「船頭ハ筆之丞等を近く呼、何やらん言へるゆえ蓋何國の人なるそと問へるなるへしと、我等ハ日本人なりと答けれハ、寒餓をあわれみ、衣装五枚をいやし、皆これを分、服せると、着るさまの手技して見せくれにけり。」『漂異紀略』(川澄哲夫編著、『中浜萬次郎集成』小学館、一九九〇年、四八〇頁) 本論(一)で述べたとおり、当時のアメリカ捕鯨船は東アジアの漂流民達に出逢う事を予期しており、その処遇に関しては一種の不文律が成立していた。基本的には、できるだけ人道的に取り扱うこと、そして、故国への帰還の道を用意してやることである。衣服を与えるのは彼らにしてみれば当然の処置だ。ただ、興味深いのは、衣食といった基本的欲求を満たしてもらうと、最初に「異国人」に抱いた危惧や恐怖感が、急激に後退していくことだ。長者丸の乗組員達も、万次郎達も救出前は共に「異国人は心ばかりがたし」、あるいは「皆々これを震恐しく思へども」と、恐怖感を告白する。理解不可能な言葉より、具体的な物がメッセージをよりよく伝え、恐怖感を払拭する現象は、アメリカ捕鯨船と日本人の接触によく現われる。長者丸の乗組員達はその後、捕鯨船員達に対して一種の愛情さえ抱いているように見える。平四郎は衣服のお返しに自分の小袖を船長に送っている。

(2)

一九世紀の太平洋における捕鯨。

(3) 一般の捕鯨船員がリクルートされ、捕鯨船に乗り組むま



註 (2)

での経緯に関しては、例えば EPH, p. 80-113 に詳しい。陸には大きく分けて三段階の組織が造られていた。まず、各地で捕鯨船員を募集し指定された港まで人員を送り込む「代理人」(Shipping Agent)、送り込まれた人員を収容し

後を立たない脱走者を見張る「宿屋」(Boarding house keeper)、捕鯨航海に必要な品を売り付ける「仕立人」(Out fitter)である。捕鯨航海希望者はこのそれぞれの段階で、必要以上の金を絞り取られる徹底的な搾取のシステムがあった。こうした人々を捕鯨船員達は「陸の鯨」(Land shark)と呼んだ。「仕立人」への支払に関しては、七〇ないし九〇ドルという数字が挙っている。

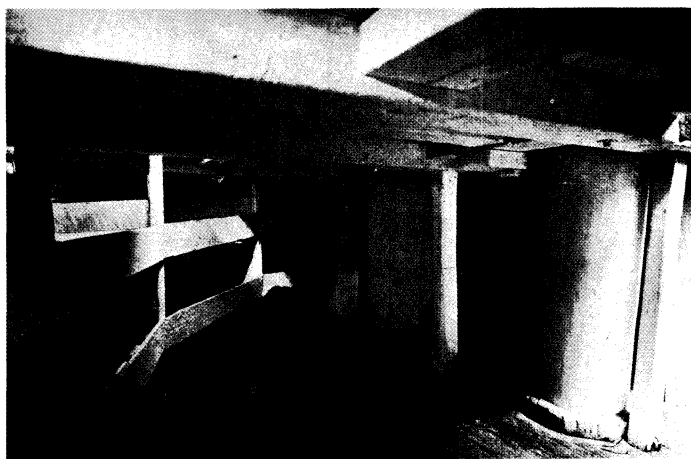
(4) EPH, p. 99 を参照。

(5) Slop Chest に関しては EPH, pp. 247—259 を参照。一八五八年、New Bedford 船籍の Canton 号から得たサンブルからは、Slop Chest の値段は仕入れ値より平均して約二倍という数値が上がっている。同書は一八四〇年代には一人あたり、平均五〇ないし七五ドルの借りがあったのではないかという推定値をだしている。

(6) 捕鯨船員の給与に関しては、EPH, pp. 217—243 あるいは W. H. Palmer, op. cit, pp. 83—119 等を参照。EPH は、四〇年代の平水夫の平均給与を一か月あたりで三〇ハドル、日当にして一〇〜二六セントと推定している。四〇年代の未熟練労働者の平均日当が、ある統計では、八五セントとなっており、生活経費を差し引いても、未熟練労働者の方が二〜三倍の収入を得ることになる。

(7) フォックスルの内部

(8) Forecastle は、多くの捕鯨航海記や個人的日記あるいは捕鯨を題材としたフィクションの格好の題材となる。代表的なものとして EPH, pp. 125—127、同時代の証言として



註 (7)

John Ross Browne, *Etching of a Whaling Cruise, with notes of a Sojourn on the Island of Zanzibar. To Which is appended a brief History of the Whale Fishery, its Past and Present Condition* (New York,

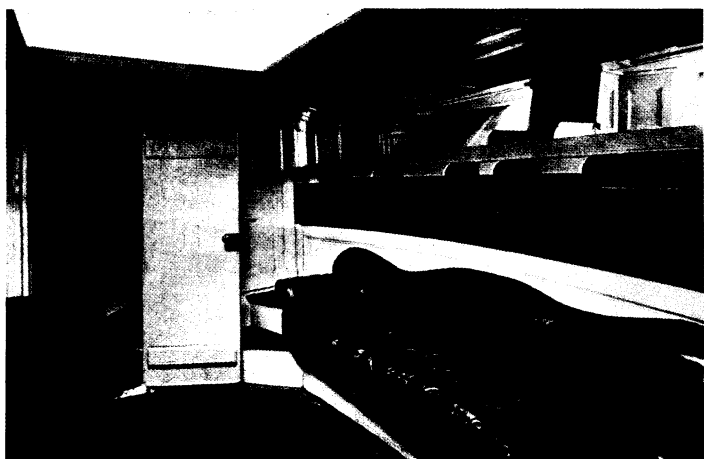
1846) pp.43, Henry T. Cheever, *The Whale and his Captors : or, the Whalemans Adventures, and the Whale's Biography, as gathered on teh Homeward Cruise of the "Commodore Preble"* (New York, 1849) pp. 306-306 を挙げておく。なおこの二冊は Melville が執筆の再種本として利用したことがある。

(9) William M. Davis, op. cit., pp. 326-327 では、船首楼の不潔さがヒューモラスに描かれている。

(10) 船長室。

(11) 一八三五年以降捕鯨船に船長の妻子が乗り組むことが徐々に行なわれるようになる。妻子が乗り組んでも十分暮らせる程度のスペースはあった。しかし、妊娠中であったり、幼い子供がいる場合には、例えばカヤオやヴァルパライン、あるいはハワイなどに一時的に妻子を住まわせることが多かった。こうした捕鯨船長夫人は各地で共同体のようなものを作っていた。James Loper 号の船長 Obid Cathcart は、一八一四年に結婚しているが、子供はなかった。一八二六年から一八五〇年まで二四九か月に都合六回の捕鯨航海を指揮し、その間一度も妻の Sally を船に乗せなかったようだ。Cathcart は二四九か月のうち二〇一か月を海で過ごしている。一〇日のうち八日を海で過ごしたことになる。捕鯨船長が妻子を伴うことになったことをハワイの宣教師達は歓迎したようだ。一八五八年一月八日付けの Honolulu Friends は次のような意見を掲載している。

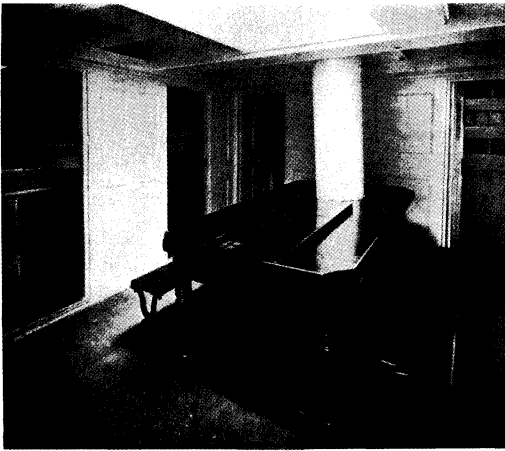
A few years ago it was exceedingly rare for a



註 (10)

Whaling Captain to be accompanied by his wife and children, but it is now very common. An examination of the list of whalers shows that no less than 24 are now in the Pacific. Just one half of that number are

- (12) now in Honolulu. The happy influence of this goodly number of ladies is apparent to the most careless observers.
妻子を乗り組ませることは Cathart が最後の捕鯨船を棄船処分にし、生まれ故郷のナンタケットで引退生活に入った後、一般化したようだ。
EPH, p. 125 等を参照。



左手奥が漂流民達の暮らした航海士用の居住地区

- (13) EPH, p. 126 等を参照。
(14) 拙論『時規物語』巻之一におけるアメリカ捕鯨船について (一五五頁参照)。

- (15) 大航海時代のワッチシステムの概略に関しては J. H. Parry, op. cit., pp. 69-82. 具体的な情報に関しては David W. Waters, *The Art of Navigation in England in Elizabethan and Early Stuart Times* (Hollis and Carter, 1956) pp. 580-583 等を参照。乗組員を二グループに分ける方法はすでに一七世紀には確立していた。
(16) EPH, p. 128. 四時間を単位として二四時間を区分けし、ワッチを交代させるやり方は Waters によれば少なくとも一六世紀後半にはすでに制度化されていたようである。
(17) EPH, pp. 140-141 等を参照。
(18) Herman Melville, *Moby-Dick*, ch. 40.
(19) EPH, p. 153. 捕鯨船が商船などと異なるのはこの捕鯨場に行った後の操業体制である。
(20) JLB
(21) Remarks on Sund June the 9 1839 All of these 24 hours light bries (sic) from the SE and E (****) Steered W by South Lats. by obs. 30° 52 Longs. by (chronomj) 199° (8)
(22) 天候はとくに指示されていながら、悪天候の際は必ず記入するので「微風」(light bries) とだけ書いていっているから、晴れと判断してよい。
(23) EPH, p. 130.
(24) John R. Bockstoe, op. cit., p. 61.
(25) Herman Melville, *Moby-Dick*, ch. 22.
(26) James F. Munger, *Two Years in the Pacific and*

Arctic Oceans and China, Being a Journal of Everyday Life on Board Ship (Vernon, 1852; Rpt. The Galeon Press; Washington, 1987) 245-246 頁を参照。

Sunday, July 6 (1851): Lowered for whales at 5 A. M., and pulled constantly until 9, most of the time to windward. A large number of ships standing to the S. W.

Sunday, August 10: Cold windy and rainy, and a heavy sea running. Lowered the boats at 8 o'clock this morning for polar whales.

Sunday, November 30: Latitude 00 degrees 33 minutes N. Weather cloudy with little rain. Black fish in large schools about the ship. The bow boat was lowered, but returned soon, as they were going to windward.

(25) Honolulu Friend には禁酒と同時に安息日を守ることを奨励する記事が頻繁に掲載されている。例えば June 1, 1846 には次のような記事がある。

Why do common seamen whale on the Sabbath? This is a question of deep interest, as it may affect the temporal and eternal well being of not less than 25000 American sailors engaged in the whaling service, to say nothing of those of other nations.

It is true that very many sailors are willing to whale on the Lord's day, and it is also true that a goodly number would prefer not to do so.

(26) EPH, p. 130.

(27) 船の葬式に関しては十分な調査が出来なかった。例えば Herman Melville, *Whale Jacket* を参照。

(28) William M. Davis, *op. cit.*, pp. 276-277 では、総員が捕鯨作業中に苦しんで死んでいった重病の同僚に対するせつせつたる文章が連ねられている。遺体はまず後甲板に運ばれ、船旗に包まれる。さらに帆布にくるまれ、船長の祈りの言葉と共に海に捨てられる。この間捕鯨作業は中断されている。

(29) W. R. Palmer, *op. cit.*, p. 112: 乗船やあるいは途中降船を希望する場合、船への借りがあると持ち物は没収され、おそくは競売にかけられた。Melville, *White Jacket*, ch. 47 48: 当時の軍艦で死者の遺品の競売が行なわれていることをベニーモラスに描いている。Melville は一八四三年八月から一八四四年一〇月までアメリカ海軍の United States 号に乗り組んでいる。このときの航海記録 Charles R. Anderson ed., *Journal of a Cruise to the Pacific Ocean, 1842-1844, in the Frigate United States* (AMS Press; New York, 1966) 245-247 の間死亡したのち六名で全員が海に葬られている。

(30) EPH, p. 316 に拠ると一八四三年から一八六二年の完全な記録が残っている一五回の航海をサンプルに、次の数字

が拳がっている。

始めの乗組員数…四八九

一隻あたりの平均
三二・六

乗船者……………一四三 (二九・二%)

九・五

途中降船者…………一六六 (三三・九%)

一・〇

死亡者……………一六 (三・三%)

一・〇六

乗船者、降船者含めて平均二〇・五名で、
海中に入れ替わるようになる。
ほぼ六二%が航

(31) JLLB July 13th 1839

Remarks on Satur July the 14 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the East

Steered to the SSE Saw two ships

Lats by obs 29.40

森 田 勝 昭

JLLB August 16th 1839

Remarks on Frid (sic) August the 16 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the SSE

Steered to the South

At 2 pm Saw a Sail to the South Lat by obs 30 : 27

Longi by chro 180 : 27

(32) JLLB June 11th 1839

Remarks on Tues the 11 1839

All of these 24 hours light breezes from the SSE

Steered (****)

At 10 AM Spoke with the Ship Galen of Warin (sic)

Lat by obs 30 : 52

Longi by chron 164 : (****) East

JLLB June 18th 1839

Remarks on Tues the 18 1839

All of these 24 hours (brisk) breezes from the (N) W

Steered to the E by N

At 10 AM Spoke with Ship Wilmington and Liverpool

Packet Cap. (Foster) (and) put on board one of

(Rescued) Men So ends Lat (by obs) 29 : 5

Longi by Chron 18 (7)

JLLB July 5th 1839

Remarks on Friday the 5 1839

All of these 24 hours light breezes from the ESE

Steered to the South Spoke the Massachusetts of New

Bedford and the Obed Mitchell of Natucket Lat by

obs 30 : 20

Longi by mcchronom 184 : 55

JLLB July 13th 1839

Remarks on Frid (sic) the 13 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the East

Steered to the South (****) Spoke with Ship Nassau

of New Bedford Lat by obs 29 : 57

Longi by Chron 184 : 37 West

JLLB Sept 13th 1839

Remarks on Frid (sic) 13th 1839

All of these 24 hours Strong breezes from the NE
Steered to the NE At 5 PM Spoke with the (Ship)
Elizabeth Starbuck of Nantucket Capt Chase Latu by
obs 31 : 3

JLLB Sept 28th 1839

Remarks on Satur (sic) the 28 1839

All of these 24 hours light breezes from the NE
Steered to the South At 2 PM Spoke with the Ship
ANN of Nantucket

(35) JLLB Sept 17th 1839

Remarks on tues (sic) the 17 1839

All of these 24 hours light Ains from the East Steered
NNE In gunnying with the Elizabeth Starbuck

(36) EPH., pp. 141-142. Herman Melville, *Moby Dick*, ch.

53 参照。

(35) 本論(一)で詳述したが、船長 Carhcart が指揮をとった航海が次のとおりである。

第一回 一八二六年九月〜一八二九年七月

Victory 号 太平洋

第三回 一八三〇年二月〜一八三二年三月

Young Phenix 号 太平洋

第三回 一八三四年七月〜一八三七年五月

Elizabeth Starbuck 号 太平洋

第四回 一八三八年六月〜一八四二年五月

James Loper 号 太平洋

第五回 一八四二年十一月〜一八四七年七月

Emerald 号 太平洋

第六回 一八五〇年九月〜(タヒチで廃船)

Ontario 号 太平洋

(36) *Sandwich Island Mirror*, Sept 15 1839 には次の記事がある。

the Fama reports following vessels Aug. 15th Eliz
Starbuck Long 166W 140 bbls this season A ship
(name forgotten) had fallen in with a Japanese junk
took out four men and little property.

八 「つづれも鯨を獵いたし候」―漂流民が見た

捕鯨作業(二)―

『時規物語』巻之一では、帆船捕鯨の様子が克明に記述されている。日本における西洋帆船捕鯨の紹介記事としてはもっとも初期のものにはいる。これ以前新井白石が『采覧異言』でオランダによる北極海捕鯨に

言及したことがあるが⁽¹⁾、分量的にもわずかなものであり、当然文献を通じての二次的知識に過ぎない。また、木村孔恭の『一角纂考』(一七九六)にもやはり北極海捕鯨の紹介記事があり、武井周作の『魚鑑』(一八三二)には帆船捕鯨も模様を描いた図も付けられている⁽²⁾。これもやはり二次的や知識によるものである。『時規物語』の記述は、捕鯨の現場で直接目撃したことに基づいたものであり、言葉の障壁を差し引いてもその価値は大きい。

アメリカやイギリスの捕鯨船と日本人との接触は一八二〇年代から各地であったようだ。このころから、日本沖合のいわゆるジャパン・グラウンドで操業する捕鯨船が、食料や水を求めて鎖国中の日本の海岸に接近する事例が少しづつふえてゆく。例えば、『甲子夜話』(文政五年、一八二二)には、文政元年(一八一八)頃から水戸沖合に異国船が鯨を取っているのを漁民達が目撃していた記事がある。このときは特別軋轢らしいことは起こらず、漁民達は船に招かれ、酒食を振る舞われたり、捕鯨船にとって必要なものを物々交

換で供給したりしている。このとき一人の漁民が捕鯨の様子を目撃し、探鯨、追尾、仕留め、曳鯨、解剖、搾油、樽詰めなどの捕鯨の基本的作業工程が簡潔に記されている⁽³⁾。

帆船捕鯨の紹介では当然中浜万次郎を挙げなければならない。万次郎関係の資料で第一に挙げられる『漂異紀略』(嘉永五年、一八五二)には、やはり探鯨、追尾、追跡、捕獲、解剖、搾油の工程が簡潔に記されている⁽⁴⁾。『漂洋瑣談』(嘉永六年、一八五三)にもほぼ同じような記述がある。捕鯨の伝統を有する土佐でまとめられたものに相応しく、網取り式捕鯨の用語を使っ
て、Boatsteenerを、「羽指」などと記述している⁽⁵⁾。『難船人帰朝記事』(嘉永五年)には解剖と搾油⁽⁶⁾、『萬次郎漂流細書』(嘉永五年)には追跡、解剖、搾油が簡潔に記されている⁽⁷⁾。

万次郎は実際に捕鯨船員として船に乗り組み、航海士にまで昇進しており捕鯨に関してはおそらく長者丸の乗組員よりはるかに深い知識を持っていたはずだ。帰国後、安政五年(一八五八)には幕府から捕鯨法伝

授のため函館出張を命ぜられ、翌年には「鯨漁御用」で、小笠原近海に出漁し、嵐にあい断念している⁽⁸⁾。万次郎は捕鯨船の指揮が執れるほど知識と経験があったにもかかわらず、万次郎関係資料ではふしぎなことに捕鯨に関しては断片的な記述に終わっている。おそらくそれは万次郎関係の資料を作成した人物達の関心が別のところにあったためである。

それに対し、『時規物語』と『蕃談』には、帆船捕鯨の様子が事細かに描かれている。この時期に黄金時代をむかえていた帆船捕鯨自体やがて衰退期を迎え、また万次郎達の努力にもかかわらず日本への技術移植にも失敗する。日本では、江戸初期に開発されたとされる網捕り式捕鯨が独自に資本主義的マニユアクトである突き捕り式の沿岸小型捕鯨が各地で営々と続いていた。網取り式捕鯨は獲物の減少から明治初期には完全に放棄され、代わって捕鯨法を備えたノルウェイ式捕鯨が導入される。沿岸小型突き捕り式捕鯨はその後受け継がれ、今日の各地の小型鯨類追込み漁に

つながっている。捕鯨史では網捕り式捕鯨からノルウェイ式捕鯨への以降が連続的に起こったと記述されることがあるが、これが議論の余地がある。江戸末期から明治初期にかけては、主として沿岸に接近する獲物の数の減少から、様々な捕鯨技術が衝突を起こしていた。この時期の帆船捕鯨の記述として『時規物語』と『蕃談』は評価されるべきだ⁽⁹⁾。

『時規物語』と『蕃談』は残念ながら秘蔵されていたため、帆船捕鯨技術が一般に知られるところとはならなかった。万次郎関係資料に比較して捕鯨に関する記述が多いのは、おそらく遠藤高環ら編集者が、政治的な意図もさることながら、数学や地理学あるいは博物学に通ずるいわば科学者の目で漂流民の経験を見ていたことに原因があると思われる。『時規物語』の「端書き」にもあるように、証言を集め、比較し、その他の資料にも目を通して参照し、最も「客観的」と思われることを記述しようとする趣旨が貫かれていたことによる。漂流民の見聞したことを細大もろさず記録し残すという遠藤等の科学的態度が、捕鯨の記述の箇所

には特に強く窺える。

捕鯨船が鯨を捜す（探鯨）様子を漂流民達はこう伝えてゐる。

鯨をとり申様子は、ケツカルの船、大概中の櫓貳拾二三間計にて帆三段、舳の櫓は貳十間計、艫の櫓は十七八間計帆貳段に相成居申候。右貳段三段の帆有之處毎に、櫓継目有之。其継目毎に、格子挾間にしたる棚有之候。下の棚わたり六尺計も有之、上程小さくなり居申候。それへ瀝青ぬりの葎縄の階子を仕掛有之。日のうちは右中櫓の上へ、兩人登り、前後の櫓へは壹人宛上り居、鯨を遠見いたし候。（29・上）

James Loper 号は Ship 型帆船だから帆柱は三本である。主櫓 (Mainmast) は、高さやく三五〇メートル、前櫓 (Fofemast) はそれより数メートル低く、後櫓 (Mizzenmast) は約三〇メートル前後だから、彼らの見積は正確である。通常帆は主櫓に四枚、前櫓に

四枚、後櫓に三枚だから若干記憶とは異なる¹⁰⁾。帆柱は数本の木材を次いで作られるが、継ぎ目のところには半円形の棚をしつらえ、帆やロープの操作をその上で行なう。これを櫓樓 (Top) と呼ぶ。帆桁から帆桁へは縄梯が延びている。梯にロープにはタール（瀝青）が塗られ補強してある。

帆の最上段には櫓上には見張り台が設けられ、証言どおり、主櫓に二名、前後櫓にそれぞれ一名の計四名の見張り (Lookout) を配置し、探鯨する。これは昼間の配置で、証言どおりである。夜は一名が主櫓の上で見張りを行なう。漂流民達は前述のように、夜はだいたい自分達にあてがわれた部屋で休んでいたようだから気がつかなかったのかも知れない。Melville はこの目も眩む櫓頭の見張りの魅力と恐怖を印象的に描いている¹¹⁾。

見張り台は甲板から約三〇メートルの高さにあり、二本の横桁の上になつてバランスを取り周囲のみに目を凝らす。櫓頭からは八〇九キロメートル崎の鯨の潮吹きを確認できたという。捕鯨船船長でもあり、長大

な捕鯨産業に関する著作を残したイギリス人ウイリアム・スコーズビー (William Scoresby) は、北極海捕鯨では橋頭の見張り台に寒さよけの囲いを巡らし、それを「カラスの巣」(Crow's Nest)と呼んだことを記している。太平洋の抹香捕鯨では通常二時間で見張り役を交代するが、スコーズビーは、ぶつつづけて一二時間見張り台に立ったことがあると豪語している⁰³。

見張りの効率を上げるため、最初に捕獲され油を絞った鯨を発見したものには航海士が褒美を与えることがあった。普通、五、六ドルの現金か、五、六ポンドの煙草が多かった。日給にして平均二〇ないし三〇セントの捕鯨船員にはかなりの魅力だったにちがいない。船員同士で鯨の発見者に対して一バーレルにつき一、二セントの報償金を出す「講制度」のようなものがあったことも報告されている⁰⁴。この探鯨の為の見張りは出港したその日から船倉が鯨油で満杯になる日まで昼夜を問わず、一日も休むことなく続けられる。『時規物語』には主橋で探鯨をする二人に人物の図が付けられている。

見張りは鯨を発見すると大声で甲板にいる者たちに知らせる。鯨の目印になるものはまず呼吸時の噴気で、Blowing あるいは Spouting と呼ばれる。日本では通常「気(ケ)」と呼ぶ。噴気は鯨の種類によって様々な特長がある。James Loper 号が専門にしていた抹香鯨は特に変わり種で、頭部の左前方にS字型の噴気孔が一つだけあり、斜前方約一三〇度の角度に噴気が上がる⁰⁵。捕鯨者はこの噴気の上がり方と、その後の潜り方で鯨種を判断した。あるいは、鯨がほぼ全身を空中に表す雄大な跳躍の飛沫も見える。この驚くべき跳躍は Breaching と呼ばれる。鯨が見せるもっとも雄大な行為の一つだ。また、巨大な尾を水面からだし、そのまま水面を打ついわゆる Lobtailing など目印になる。見張りは遮るものもない三六〇度の視界にこうした目印を追う。

鯨発見を大声で知らせることを Sing Out と呼ぶ。橋頭から届く長く尾を引いたような呼び声は、漂流民達の耳に印象的に響いたのだろう。

此鯨を見付候へば「アーシーブロリ」と聲長く幾度も見張の者呼申候。これを聞候て「キャップン」紐付きの遠眼鏡を肩にかけ、皮沓をはきながら、縄階子をのぼり候。これは難儀の所作にて、仰向き候て、棚のしたつらに取付、這いのぼる處など有之、甚むつしきやうに見え候へども、船の者共はいづれも自由に上り申候。擬「キャップン」中櫓の三だんの上にて、鯨の品を目利いたし「スッパンホル」に候へば、いつも喜びの躰にて、早速下り鯨を追掛鯨せ申候。(29・下)

「アーシーブロリ」は Sing Out の時の常套句で、There She Blows のことである。この言葉は帆船捕鯨でもっとも有名になったものであり、帆船捕鯨のキャッチフレーズとも言えるものだ。そのほかに、跳躍が見えたときには There She Breaches、潜水前に水面上に突きだした尾が沈んで行くときには There Go Flukes などの掛け声があった⁹⁸⁾。

航海日誌によると James Loper 号は漂流民を救出

してからほぼ一か月間、長須鯨とゴンドウを見かけたほかは(六月八日)⁹⁹⁾、目指す抹香鯨には出会えなかったようだ。救出後初めて鯨発見の記事が記載されるのは七月一六日である¹⁰⁰⁾。昼食を終え、Hardack と塩漬肉の詰まった腹を抱えて、真夏の亜熱帯の陽光に躰をさらしながらぼんやりしていた午後一時、漂流民たちははじめて耳にする緊張した叫び声に驚き、櫓頭を見上げた。帆の影から見え隠れする小さな櫓頭からは何度も There She Blows の声が甲板に響いた。それまでのんびり談笑していた船乗り達の顔つきが急に陰くなり、船全体が騒然とし初めただろう。この日から八月八日まで、James Loper 号は捕鯨作業に忙殺されている¹⁰¹⁾。

鯨を発見した後はいよいよ追跡である。

程よく相成候へば、船の横手に釣置候舢に兩人をのせ綱にておろし、又壇階子を下げ、それより四人乗入り、都合六人にて漕離れ、もと船より相圖いたし候旗色にしたがひ、鯨を追掛申候。旗は東

西南北を色分にしたるを、もと船より揚候へば、其色にて其方角へ漕申候。(29・下)

Ship 型帆船には通常四隻の捕鯨ボートが鈎柱(Davit)から吊下げられている。右舷後甲板には船長用あるいは第四航海士用の Starboard Boat が、また左舷後甲板には船尾から船首に向かって、Larboard Boat, Waist Boat, Bow Boat が吊下げられており順に一等航海士、二等航海士、三等航海士が乗り組む。此四隻のボートは、それぞれ違った名がついているが、型や装備は全く同じである。鯨を仕留めた際、鈎を打ち込んだボートの名を航海日誌に記すこともよく行なわれる。

一隻のボートには通常六名が乗り組む。捕鯨ボートのリーダーである航海士(又は船長)と、鈎手一名、漕ぎ手四名の計六名である。この編成はおそらく一、二世紀に成立するバスク捕鯨の技術系統をひくもので、イギリスには一六世紀後半にその原形が流入しその後アメリカに受継がれたと考えられる。

鯨を発見するとまず、船尾にリーダーの航海士、船首に鈎手が乗り込み、ロープと滑車で海面にボートを降ろす。次に、海面に浮かんだボートへ四名の漕ぎ手が縄梯子をつたい、まるで「山羊のように」ボートに飛び乗り、それぞれ所定の位置につくと準備が完了する。この一連の行動を Lower away という。James Loper 号の航海日誌には、Lowed という表記が使われている。通常三ないし四隻が出漁し、船長は出漁するときとしないときがある。『審談』には「脚船三只ヲ撥テ之ニ随フ」(286・上)とあり、これが正しいとすれば船長の Catboat は出漁していなかったことになる。五〇才という年令を考えると当然かも知れない。

捕鯨ボートのリーダーの航海士は鯨を突くという最終局面ではほとんどの自分の判断で捕鯨作業を指揮してきた。しかし、それまでは、捕鯨船の旗や帆を使う独特の信号システムが、追跡の方向を指示した。このとき見張り台には当然人員が配置されていた。見通しのきく場所から信号で現場を指揮する方法は、世界各地の大型捕鯨に共通してみられる技術である。日本でも

太地等の網捕り式大型沿岸捕鯨では、探鯨用の高台（山見と呼ぶ）から、旗で沖合に展開する瀬子船に合図を送っていた。

漂流民達は捕鯨ボート（鯨）の形や大きさ、人員構成に關しても正確な觀察を残している。

鯨は厚さ五六歩の板にて造り、長さ三間計幅四五尺ばかりにて、至て軽く相見え、左の方に居候者は權の先を右の舷へ出し、右の方の者は又左の方の舷へ權を出し、たがひちがひに居候て漕申候。櫓は壹本にて、風により帆を揚申候。日本の櫓權にて漕ぎ候とは餘程早く、貳艘の内はやく追付候程より、魚稔を打申候。（29・下）

捕鯨ボートは捕鯨用に高度に発達した快速軽量小型艇で、研究者によれば中世の北ヨーロッパに起源があるらしい。中世後期にバスク地方で、その後はイギリス、オランダ、ニュー・イングランドでほぼ一〇〇〇年をかけて改良され、一九世紀には完璧の域に達する

双方向へ進める両頭船（Double-ended）だ²³。船板は厚さ一インチ四分の三（二インチ四分の一（約四、五センチメートル）で、樫材が多い。漂流民達の「五六歩」は薄すぎるかもしれない。長さは平均で約二七ないし八フィート（約八メートル）で、見積の「三間」（約四・五メートル）はやや短い。幅は約五フィート（一・五メートル）で、このほうの記憶は正確だ²⁴。

ボートは權（Oar）と櫓（Paddle）の両方を使い分けて進む。船尾に陣取った航海士が命令を下しながら舵を兼ねたオール（Steering Oar）を握り、残る五人が權や櫓を漕ぎ鯨を追跡する。權は漂流民の証言どおり、左右交互に舷へ出す。右舷に三本、左舷に二本である。このとき当然漕ぎ手達は進行方向に背を向けている。風でしかも鯨が比較的近いときにはパドルを用いる。パドルは速度は落ちるがその分静かである。このときは漕ぎ手達は進行方向に顔を向ける²⁵。風が利用できるときは帆を揚げる。帆柱は普段取り外し、ボートに寝かせてある²⁶。

鯨にはだいたい二方向から接近する。鯨の後方から

接近する方法を Going on The Flukes、前方から接近するのを Taking It Head and Head という。この二方向は鯨の死角になっている。可能ならばほとんど鯨に乗り上げるくらいまで接近する。『蕃談』では「相距ル六尺計ニ至テ鏢ヲ投ス」(286・上)とあるが、あながち間違いいではない。航海士の命令で鉚手が鉚(Harpoon)を手に立ち上がり、揺れるボートの船首でバランスを取り、鉚を打ち込む。接近が不可能な場合には鉚を上空に投げ、落下する力で深く刺さるようにする。これを Pitch Poling と²⁸⁾いう。

鉚がうまく刺さると鉚手は航海士と位置を交代する。今度は航海士が船首に、鉚手が船尾に陣取るわけだ。船首にたった航海士は槍状の鉚(Lance)でとどめを刺す。仕留める最後の段階で鉚手は船尾へ移動し舵を受け持つので、操舵手(Boatsleerer)の名がある。Harpooner と言うよりむしろこの符蝶のほうがアメリカ帆船捕鯨では通常の呼び名だったようだ。Melville は危険な状態でわざわざ位置を交代するこの習慣について馬鹿げているとからかっている²⁹⁾。おそらくは、

最後に誰が仕留めたかという名誉にかかわる問題なのだろう。鉚につけたロープが、苦しまぎれに逃げ回る鯨に引かれ凄まじい勢いでボートの中を走る中を、二人の人間が移動することは確かに危険なことであり。この風習にまつわる事故もあった³⁰⁾。漂流民達はおそらく初めて目にする大型捕鯨に目を凝らしただろう。その記述は細部にわたっている。次に捕鯨用のロープと鉚について見てみる。

此魚鯨の綱は苧縄などを瀝青などにて塗たる様に見え、百尋計も桶に入置候。槍様のもの并白き櫻欄縄も有之候。鉚を打ち候は壹人の所作にて、最初壹本は随分鯨の頭を心掛打、夫より又壹本打申候。鯨海底へ沈候時は綱を延ばし行く儘に漕行候。魚鯨は仕掛有之て、木の柄は抜け綱迄に成候に付、鯨狂いうごき候に随ひ、肉の中へ魚鯨より込み候。それ故次第に鯨よりうき申候。(29・下)

捕鯨用の鉚にはロープが着いている。初期にはアメ

リカ麻 (American Hemp) に軽くタールを塗ったものが使われた。直径は三分の二ないし八分の七インチだった。長者丸の時代にはそれよりも強靱なマニラ麻が使われるようになっていた。柔軟性を持たせるためタールはほとんど塗らなかった。直径は三分の二インチくらいである。ロープは銚手の責任で二つの桶にきちんと巻き納められ、ボートに積み込まれる。大きいほうの桶には二〇〇ないし二五〇尋、小さいほうの桶には七五尋分が納められていた⁹⁰。「百尋計」は、おそらく小さいほうの桶のことだろう。太三郎の乗った Wilmington and Liverpool 号では、「三百尋計」(30・上)の綱を見たと言言している。これは明らかに大きい桶の綱のことである。

鯨を仕留める道具にはまず銚 (Harpoon) がある。

先端の部分は返しがついており、いったん刺ると抜けにくくなっている。アメリカ捕鯨船ではこのバスク語に起源を持つハーブーンという言葉より⁹¹、直接的に Iron (鉄) と呼ぶことの方が多かった⁹²。

このアイロンは帆船捕鯨時代に三段階の改良を経験

している。一八三〇年代までは、おそらくヨーロッパそしてアメリカで五〇〇年以上の歴史を持つ両刃アイロン (Two-Flued Iron) が使われてきた。両刃アイロンは鯨に刺さった後抜け落ちる傾向があったので、三〇年代に改良が加えられ、片刃アイロン (Single-Flued Iron) が登場する。この改良型は四〇年代までには広く受け入れられるようになる。その後一八四八年になって返しの部分だけが軸の上で回転する Toggle-Headed Iron が登場し、捕鯨銚の技術は頂点に達する⁹³。これ以降は捕鯨銃、捕鯨砲の時代となる。James Loper 号は両刃から片刃への技術移行期の船だったが、『時規物語』と『著談』に残された図はこの船がまだ古い伝統的な両刃アイロンを使っていたことを示している。

アイロンは鯨が暴れるにつれて深く食い込んで行く。アメのようにまがったアイロンが仕留めた鯨から取り出されることもよくあった。柄の部分は木で出来ており、鉄の部分が刺さった後、抜け落ちるようになっていた。十分接近し銚手がアイロンを打った後、同じ

ロープにつないだ二番目のアイロンを打つ。これを Second Harpoon と呼ぶ。アイロンを打つ瞬間漕ぎ手達はオールを海からだし、空中に掲げる。これを Peaked Oars と呼ぶ。「圖十二」にはそのときの模様が正確に描かれている。すべては証言どおりだ⁸⁴。

アイロンが打ち込まれると、鯨は海に潜り逃げ始める。アイロンとボートはロープでつながれている。

ボートの中からは次々とロープが繰り出される。ロープはボート後方の桶からいったん船尾の短い木の柱 (Logger-Head) へ延び、その柱を回転して再び船首

のほうへ延びているので、ボートの中を猛烈な勢いでロープが走ることになる。このロープに引っ掛けられる事故もよく起こった。摩擦でロープが焼けないよう水を掛けることも必要だった。鯨が走るかぎりありったけのロープを繰り出し、足りなければ別のボートのロープにつなぐこともある。ボートは鯨に引かれて海面を走る。「綱を延ばし行く儘に漕行候」はこの場面のことである。猛スピードの時はボートはまるで橈の様に海面を滑る。これを「ナンタケットの橈滑り」

(Nantaket Sleigh Ride) と呼ぶ⁸⁵。

前述のように最終場面では場所を交代した航海士がとどめを刺すのだが、このとき使う道具が漂流民の云う「槍様」のもので、ランス (Lance) と呼ばれる。『時規物語』、『蕃談』両方の図は先端がやや細すぎると言う欠点を除けばこの道具のイメージをよく伝えている。しかし、図はどちらかと言えば日本の捕鯨用の道具を思わせる。遠藤等は江戸時代中期から登場する鯨あるいは捕鯨を記述した書物を参照にしている可能性がある⁸⁶。

さて、とどめを刺すとき出来れば肺か、あるいは Lie と呼ばれる血が集まる箇所を狙い、数フィート食い込んだランスを激しく上下させる。これを Churn-
ing という。漂流民達の「槍鉦のするとき身を仕込みたる三間計の道具にて鰭の下等を突刺り申候」(31・上)は、このときの模様だろう⁸⁷。

鯨は狂ったように輪を描きながら泳ぎまわるようになる。呼吸孔からは血を吹き出し、口からは胃の内容物が吐き出される。この状態を Flurry という。やがて

鯨は動きを弱め、背鰭の様に見える背中の突起が海面から姿を表すと、追跡も終わりに近づく。これを Finning Out という⁹⁸。個々の細かな技術がいかに近代化され、産業自体が資本主義化されていようとも、この瞬間、捕鯨は古来人類が営んできた狩猟の原始の臭いを発散する。捕鯨に魅了される人も、あるいは逆に嫌悪を感じる人も、共に巨大な生物が死をむかえる瞬間に時間の深さや闇を直感するのだろう。世界中の捕鯨者達はこの瞬間、憐れみと畏敬の念で鯨を見つめていたことが多くの証言にある。長者丸の乗組員達も、おそらくは初めて目にする捕鯨に度肝を抜かれ、息をのみながら血に染まった海での壮絶な死を見つめたことだろう。「其邊の海水真赤に成、鯨遂により候」

(31・上)

現場では航海士と鉛手の技量が捕鯨の成否を決定するもっとも重要な鍵だった。すべての行動が経験という複雑かつ極めて正確な知識体系によって計られ、即座に決定され、実行に移される。捕鯨はいかに装備が近代化されようとも最終場面では狩猟という古く複雑

な人間の行為に還元される。また、この経験が極めて危険な捕鯨作業の危険率を下げることもなる。漂流民達はこのことを看破していた。「鯨を取候には第一楫取等心に機轉なくては、時により鯨の爲に、舻破損いたし、溺死の者有之由に候。」(31・上) James Loper 号もそういった事故に遭遇した。七月三〇日午前六時、抹香鯨の群れを発見して、ボートを降ろし、一頭を仕留めている。しかし、このときの追跡では一艘のボートが鯨のためのに船底に穴を開けられている。これを Stove Boat と呼ぶ。幸い死者はなかったようだ。このボートは八月八日になって修理されている⁹⁹。ボートに穴を開けられるのは捕鯨場ではありきたりの事故だったようだ¹⁰⁰。

もしも追跡が夜にづれこめば中止される。鯨を発見すれば日のあるかぎりいつでも出漁したから、こういった事態は頻繁に起こった。その時の様子を Wilmington 号の太三郎は次のように伝えている。

或時「キャップン」「ジャイキ」の船にて取獲たる

鯨日暮に成候ゆゑ、魚孫貳本打たる儘にて死たるを鎖にてつなき置候處、海上大荒になり鎖切れ鯨も流れ失申候。(31・上)

鯨は最初に銚を打ったものに所有権がある。銚を打ち込まれた状態の鯨を「仕留め鯨」(Fast Whale)と呼び、鯨体についた捕鯨道具が所有権の証拠となる。それを「道具が所有を示す」(Craft Claims)と、言いならしめていた。追跡中夜になりそれ以上の作業が不可能なときや、仕留めた鯨をいったん放置し次の鯨を追跡する必要があるときは、旗を突けたポールを鯨体につき立て目印とする。このポールを Waif と呼ぶ。太三郎は詳しく報告しているわけではないので判断できないが、Wilmington and Liverpool Packet 号は、この Waif を付け、鎖で船に鯨をつなぎ留めていた可能性がある。仕留めた鯨の所有権に関しては様々な争いがあり、Melville はそれについて一章を費やしている⁽⁴⁾。

James Loper 号でも七月二十七日と九月三〇日の二回、捕鯨作業をいったん中止することがあった。九月

三〇日の航海日誌によると、午後四時に鯨を発見し、二頭を仕留め、次の日の(航海日誌では正午から正午までを一日とするので、日誌上では同じ日になるのだが)午前九時から解体作業に取り掛かっている⁽⁴⁾。やはり、Waif を突け鎖で船腹に縛り付けておいたのだろう。

長者丸の乗組み員達の捕鯨に関する証言は非常に細かな点にまで及んでおり、しかも技術上の急所を突いている。彼らの目に留まったのはほとんどが帆船捕鯨技術のポイントであり、改良が積み重ねられたところでもある。万次郎関係の記録が、捕鯨の概略をやや抽象的に伝えているのと対照的だ。長者丸の乗組員達の証言は捕鯨に関しても異常に正確である。おそらくこの正確さから判断して、『時規物語』、『蕃談』の他の部分もまれにみるくらいの正確さでかかれていると言つてよいのではないか。ただ、『蕃談』に関しては、遠藤も批判しているように古賀謹一郎が個人的政治姿勢を披瀝する部分とファクチュアルな部分を区別して考える必要がある。

註

- (1) 新井白石、『采言異言』
- (2) 木村孔恭、『一角纂考』、寛政七年(一七九五)年(甲南女子大学「上野文庫」所蔵)。および部井周昨『魚鑑』、天保二年(一八三一)(甲南女子大学「上野文庫」所蔵)
- (3) 松浦静山『甲子夜話』。川澄哲夫編『資料日本英学史』上—英学史とはじめ—。大修館書店、一九八八年。五六五—五六七頁参照。「一日に八疋とり候事有之由第體鯨魚一疋に三四人懸り事濟候帆柱の上に一人上り居り千里鏡を以て遠見致し其合圖有之候得ば合圖に随ひ皮船一艘二人乗一人は舟をおし一人はもりを持、鯨魚潮を吹浮み上り候處え乗付けもりを入合圖見合又浮み上り候處え同様いたし大抵二度或は三度位にて鯨魚よりはり候を如何の手段致し候や右皮舟にて元船迄引来り船脇え綱を以て繋ぎ置き大なるハムカにて程々に切目を付け船上より轆轤を以て熊手の如き詰付き候綱を下し右爪を切目へ押入轆轤にて引上げ肉を剥取暫時の間に骨斗りとなりし骨と頭は其俣海底え抛置直に其肉を大ランビキの内え入、油に絞り候船中に槽樽細工致し候もの有之槽材を棄編にて持渡り入用にひ籠をかけ樽を製し空樽を船の隅々え行儀よく並べ置き皮にて製し候篋を其高下屈曲に随長短續合せ、ランビキより直に樽え油を流し入十分に満るとき蓋をして、チャンにて塗封し又皮篋の口を外の樽え移し同様取斗候故持運の力を勞せずしてはか行なり薪は油を絞り候肉の滓を日に曬し用ゆる故船中臭気甚し
- (4) 『漂異紀略』(嘉永五年、一八五二)、川澄哲夫編著『中浜万次郎集』小学館、一九九〇年、四八二頁。
- (5) 『漂洋瑣談』(嘉永六年、一八五三)、同書、五八三頁。
- (6) 『難船人帰朝記事』(嘉永五年、一八五三)、同書、六三七頁。
- (7) 『萬次郎漂流細書』(嘉永五年、一八五三)、同書、六八八頁。
- (8) 「捕鯨法教授のため函館出張の辞令」(安政四年、一八五七)、同書、八一七頁。「捕鯨御用の申渡書」(安政六年、一八五九)、同書、一八七頁。「萬次郎の日記」(中浜家蔵)、同書、七一七頁には安政六年八月、建造中の捕鯨船を見まわったことが記されている。
- (9) 福本和夫著『日本捕鯨史話』、法政大学出版局、一九六〇年等を参照。
- (10) 捕鯨船の構造や大きさ等に関しては、一次史料を利用してきなかつた。James Loper 号は一八三七年の建造となっているので(本論一、二〇頁参照)、ほぼ同年代の四〇年に建造され Melville が乗り組んだ New Bedford 船籍の捕鯨船

Acushnet 号のものと比較した。Acushnet 号は三五八トンの ship 型帆船であり、三四八トンで ship 型の James Loper 号とは同じ規模の帆船と言える。なお、Acushnet 号の大きな構造に関しつは、W. L. Heflin, *Herman Melville's Whaling Years* (Vanderbilt University ; Dissertation, 1952) を参照した。それによると、Acushnet 号の場合、主樁は甲板から一三フィート、後樁が九〇フィート、となっている。

(11) 帆の数等に関しつは、John Fitzhugh Millar, *Early American Ship* (Thirteen Colonies Press ; Williamsburg, Virginia, 1986) ㉔㉕ Frances Diane Robotti, *Whaling and Old Salem* (Fountainhead Publishers ; New York, 1962) の図版、George Francis Dow, *Whale Ships and Whaling* (Marine research Society ; Salem, Mass., 1952) の写真集を参考にした。

(12) EPH., pp. 153-156 等を参照。Melville, *Moby-Dick*, ch. 35. 見張りは別名 Mast-Header と呼ばれる。

(13) William Scoresby, *An Account of the Arctic Regions, with a History and Description of the Northern Whale-Fishery* (Edinburgh, 1820 ; Rpt. David & Charles Reprints, 1969) vol. 2, p. 207, p. 237. この書物は一九世紀前半の最大の捕鯨産業史で、Melville もろくに利用している。記述されているのは北極海域の捕鯨が中心で、捕鯨産業史、捕鯨技術誌、社会誌、博物誌といった範囲に及ぶ。



マスタフンド

記念碑的著作である。

(14) EPH., p. 154.

(15) James Loper 号と同時期の Thomas Baile, *A Few Observations on the Natural History of the Sperm Whale with an Account of the Rise and Progress of the Fishery and the Modes of Pursuing, killing, and Cutting-in that Animal* (London, 1835) p. 28. ㉔㉕ その増補版 *The Natural History of The Sperm Whale* (London, 1839) p. 42 には詳しくその模様が描かれている。この著作は世界で初めての抹香鯨専門書であり、極めて正

確な記述が特長である。

- (16) J. R. Browne, op. cit. pp. 115 (イタノ) の横面を主として
描く。イタノ。

"There she blows !" was sung out from the mast-head.

"Where away ?" demanded the captain.

"Three points off the lee bow, sir !"

"Raise up your wheel. Steady !"

"Steady, sir !"

"Mast—head ahoy ! Do you see that whale now ?"

"Aye, aye, sir ! A school of sperm whales ! There she

blows ! There she breaches !"

"Sing out ! Sing out every time !"

"Aye, aye, sir ! There she blows ! There—ther—thar"

she blows—bows—b—o—o—o—s !"

"How far off ?"

"Two miles and a half !"

- (17) JLLB June 8th 1839

Remarks on Satur(sic) june 8th

All of these 24 hours light breezes from the SE

Steered W by (****) and W by S Saw finbacks

blackfish Lati by obs 30 : 45

Longi by chron 191 : 41

- (18) JLLB July 16th 1839 (追跡失敗)

Remarks on Mond (sic) the (16) 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the East At
1 pm saw whales put of (sic) and chased At (****)

**) the boats came on board At 6 AM saw a whale
put of (sic) and chased at 11 the boats came on board

Lati by obs 28 (*****)

- (19) JLLB July 17th 1839 (追跡失敗)

Remarks on Wed (sic) the 17 1839

All of these 24 hours light breezes from the East
Steered (NNE) and SSE At 10 AM saw whales put of

(sic) and chased Lati by obs 28 : 48

Longi by Chrono 183 : 48

- (20) JLLB July 22nd 1839 (追跡) | 頭仕留め

Remarks on Mond (sic) the 22 1839

All of these 24 hours brisk breezes from (*****)

Steered NE At 5 AM

Saw whales lowd (sic) Struck and caught one So ends

Lati by obs 30 : 44

- (21) JLLB July 26th 1839 (追跡失敗)

Remarks on friday the 26 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the East

Steered (N by E)

At 10 AM Saw whales So ends Lati by obs 30 : 48

- (22) JLLB July 27th 1839 (追跡) | 頭仕留め | 解体開始

All og these 24 hours strong breezes from teh ESE
At 4 PM saw whales lowd Struck and caught one At
4 AM began cuting (sic) At 8 finished Lati by obs 30 :
25

longi by Chron 182 : 47

㊟JLLB July 30th 1839 (可鯨° | 頭仕鯨&° 午ームニ
くや&たふ&°)

Remarks on tues (sic) the 30 1839

All of these 24 hours light breezes from the East
Steered (****) E and (NE)

At 6 A.M Saw whales lowd struck and caught one
(****) A boat stove

㊟JLLB July 31st 1839 (可鯨° | 頭仕鯨&° 搾油開始)

Remarks on Wed (sic) the 31 1839

All of these 24 hours light breezes At 8 A.M Saw
whales Lowd struck and caught one So ends Employed
In boiling Lati by (obs) 31 : 20

㊟JLLB August 1st 1839 (搾油° 鯨発見° 追跡° | 頭仕
鯨&°)

Remarks on Thurs (sic) brisk breezes

Employed In boiling At 5 AM

Saw whales (****) Struck and caught one Lati (by
obs) 31 : 10

㊟JLLB August 2nd 1839 (解体° 搾油)

Remarks on friday Augus (sic) the 2 1839
All of these 24 hours brisk breezes from the SSE
Employed in Cuting (sic) (and) boiling Lati by obs
182 : 39

Lati by obs 31 : 44

㊟JLLB August 3rd 1839 (鯨取)

Remarks on Satur (sic) the 3 1839

All of these 24 hours strong breezes from the SSE
Stood to the East Employed in boiling Lati by obs 3-
1 : 36

㊟JLLB August 4th 1839 (鯨取)

Remarks on Sund (sic) the 4 1839

All og these 24 hours brisk breezes from the SSE
Steered to the East So ends Employed In boiling Lati
by obs 31 : 55

㊟JLLB August 5th 1839 (鯨取° 曲鯨° ぐぐ)

Remarks on Mond (sic) the 5 1839

All of these 24 hours Strong breezes from the SSE
Stood EEW Employed In boiling and Storing down oil
Lati by obs 31 : 10

㊟JLLB August 6th 1839 (曲鯨° ぐぐ)

Remarks on Tues the 6 1839

All of these 24 hours Strong breezes from the ESE
Employed IN Storing down oil Lati by obs 30 : 57

②JLLB August 7th 1839 (油積み込み)

Remarks on Wed (sic) the 7 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the South
Stood to the East Employed in Storing down oil Lati
by obs 31 : 12

Longi by obs 181 : 36

③JLLB August 8th 1839 (ボート修理)

Reamrks on Thurs (sic) the 8 1839

All of these 24 hours brisk breezes from the South
Steered to the (****) And to the SSW Employed
in repairing the stove boat lati by obs 30 : 56

Longi by chron 183 : 15

②0 船によると四人の航海士が乗り組むことがあった。

EPI, p. 231 には四等航海士までがリストに上がっている。おそらく捕鯨船の大型化にしたがって順次増えていったと考えられる。一八五六年の数字では、一等航海士二〇レイ、二等航海士三五レイ、三等航海士五二レイ、四等航海士五五レイとなっている。

②1 Richard Hakluyt, *Principall Navigations* (London :

1600) 一五七五年の日付の或おそらくはモスクワ会社の手になると思われる文書には五人編成の捕鯨ボートが言及されている。この情報はバスク捕鯨者から入手したものである。*だ' Samuel Purchas, *Hakluytus Posthumus : or Purchas His Pilgrimes* (London, 1625) 6' 初期北極海捕

鯨の図版にははつきりこの形が描かれている。拙論「ヨーロッパにおける捕鯨と鯨の図版について—イギリスの北極海捕鯨を中心に—」(名古屋大学総合言語センター特定研究K言語表現とイメーシ』一九九一年)参照。
②2 例えは註⑱あるいは注⑲の①'②'④'⑤'⑥の航海日誌の記述を参照。

②3 Willis D. Ansel, *The Whaleboat : A Study of Design, Construction and Use from 1850 to 1970* (Mystic Seaport Museum, Incorporated, 1978) pp. 7-28 参照。同書は捕鯨ボートに関わる多くの信頼の置ける専門的研究書である。

②4 Willis D. Ansel, *ibid.*, p. 36.

②5 *Ibid.*, ch. 5, pp. 51-65 参照。

②6 *Ibid.*, ch. 6 pp. 66-75 参照。

②7 EPI, p. 160.

②8 Merman Melville, *Moby-Dick*, ch. 62.

②9 例えは、Honolulu Friends, September 1843 の死亡記事に次の記載がある。

Mr Ebenezer Peck, belonging to, Vermont, Mate of the Huntress, was taken out of the boat, by the line getting foul, on the 25th May, 1843.
③0 Willis D. Ansel, op. cit., pp. 61-61 参照。
③1 Frances Diane Robotti, op. cit., p. 2.
③2 Charles M. Seamon, *The Marine Mammals of the*

North—Western Coast of America Described and Illustrated : Together with an Account of the American Whale—Fishery (New York, 1874 : Rpt. Dover Publication, Inc. ; New York, 1968) p. 224. Willits D. Ansel, p. 63, William Scoresby, op. cit., vol. 2. Appendix, Plate XVI 等を参照。

(33) John R. Bockstoe, op. cit., pp. 61—62.

(34) Willits D. Ansel, op. cit., ch. II, 15—28.

(35) EPH., p. 160.

(36) 日本の槍の図。太地捕鯨図より

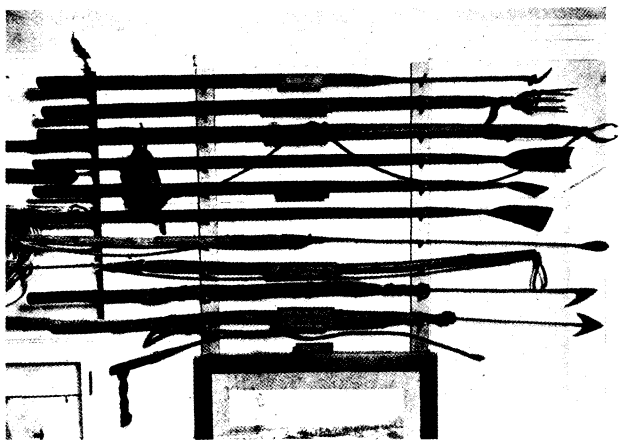
(37) EPH., p. 162.

(38) EPH., p. 162.

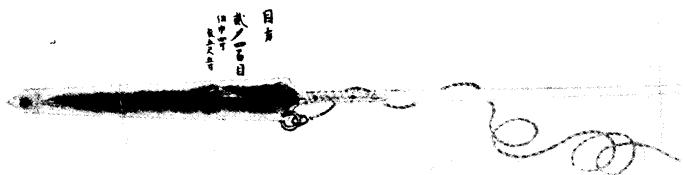
註(39)の⑤、⑭の航海日誌を参照。

(40) 史上有名な Slove boat の例に、一八二〇年一月に赤道付近、西経一二〇度で起きたナントケット船籍の Essex 号の事件がある。このときは捕鯨船自体が巨大な抹香鯨によって沈没させられている。この事件に関しては同船の一等航海士であった Owen Chase の 'Narrative of the Most Extraordinary and Distressing Shipwreck of the Whale—Ship Essex of Nantucket which was attacked & finally destroyed by a large Spermaceti—Whale in the Pacific Ocean (1821)' がある。この記録が Melville の多大の影響を与えたことは有名だ。この資料は Canberra の National Library of Australia から提供頂いた。なお、)

註(33) アイロンの図



註(36) 日本の槍の図



の事故については Thomas Farel Hefferman, *Slove by a Whale : Owen Chase and the Essex* (Wesleyan University Press, 1981) と言う詳細な研究書がある。

(41) 他の船と同じ鯨を争うようなとき、アイロンやランスなど、捕鯨装備が鯨についていればその鯨の所有権を主張できた。この習慣を「The craft claims the whale.」と言う。
EPH., 9, 166, Herman Melville, *Moby-Dick*, ch. 89等を参照。

(42) 七月二七日に関しては註(19)④の航海日誌記録を参照。九月三〇日に関しては次の記載がある。

JLLB September 30th 1839

Remarks on Mond (sic) the 30 1839

All of these 24 hours brisk breezes At 4 PM Saw whales lowd Struck and caught two At 9 AM Cut them in Steered to teh NE So (****) Employed In boiling Lati by obs 22 : 00
Longi by chron 154 : 4

九 「いづれも鯨を猟いたし候」―漂流民が見た

捕鯨作業(2)―

仕留めた後は、巨大な死体と本船との間にある海が問題になる。『時規物語』は、ごく簡潔に「本船に合圖をいたし候。其節本船来たり」(31・上)と、本船が捕鯨ボートの方へ出向くことを記述している。本船が風

上に位置している場合、本船の方が捕鯨ボートに近づくことが多く、また逆に本船が風下に位置している場合や、風の場合にはボートが仕留めた鯨を引いて本船まで運ぶ。時には数時間を要するこの作業は、追跡ですでに疲労困憊した乗組員にとってもっとも嫌な骨の折れる仕事だった。鯨を本船に横付けしてから解体の手順に関して次のような証言がある。

鯨の頭の方を鰭にして、水の上へ三分の一出る様に、鎖をもってあとさき輪がけおき、「ショースペル」(鯨の皮を切る刃物)といふ道具をもつて、首を突切り離し申候。それより右道具にて、切りはなしたる切り口の方の脂肪皮を、六尺四方計に切りおこし、それに穴をあけ、鐵の鉤に掛け、段々と萬力車にて引揚候。萬力車は舳と鰭の方両方の檣に綱をわたし、其中程に付け、八寸廻位の縄に縄より太きほどの鉤を付け、萬力車も綱も貳通に仕掛けあるを、引き揚たる鯨の脂肪皮とミの間を「ショースペル」にて切はなし、脂肪皮の幅

六尺計長さ壹丈計、旗のやうに相成候時、又他の鉤をかけおき、右の脂肪皮を切りはなし取入候。か様にくりぐに幾度も鉤にてかけ、脂肪皮を全く切取申候。最初の鎖のつなぎ様にて、脂肪皮を剥ぎ候に随ひ、全身くるりと廻り候。全く剥取候へば、肉を海へ捨申候。(32・上)

James Loper 号が専門にし、また当時のアメリカ捕鯨船のほとんどが狙った抹香鯨は最大で体長一ハメートル、体重五〇トンに達するものがいた⁽¹⁾。この巨鯨を本船に付けると、尾の付け根のもっとも細い部分 (Small) に鎖をかけ、船の右舷に頭を船尾に向けて平行に並べる。頭部は目と鰭のほぼ中間に穴をあけ、鎖を通し船に固定する。本船との間に鯨を挟み込むような形で、「足場」(Cutting Stage) を取付け解体が始まる。『蕃談』には「足場」の図が描かれているが、実際は船からカタカナの「コ」の字型に突き出たものである⁽²⁾。解体作業を Cutting-In と呼ぶ。解体 (日本では解剖という用語を使う。日本の場合、内臓から骨にい

たるまでほとんど全身を利用するためこの言葉が相應しいが、当時の帆船捕鯨では脂皮だけを利用したので本論では訳語として解体という言葉を使う。) は、船の右舷で行なうのが伝統である。解体用のスペースを確保するため、右舷はボートを二隻しか釣り下げないのは前述のとおりである。『時規物語』と『蕃談』には解体作業中の船の様子が描かれている。『時規物語』出は船首が描かれていないため判断できないが、『蕃談』では左舷で解体作業が行なわれている。これはおそらく記憶違いか、あるいはそこまで気を使わなかったどちらかだろう。

解体の第一段階は漂流民達が証言しているように、貴重な脳油 (Spermaceti) が約一トン詰まった頭部の切り離しである。これは普通、船長と一等航海士の仕事である。(この脳油に関しては後述する。) このとき使う道具が Space である。漂流民達の耳に飛び込んできた「シヨースペル」という言葉は、この The Spade とどういふだろう。次郎吉も「サスペリ」と記憶していた。『時規物語』と『蕃談』両方にその図が添

えられている。前者は刃の根もとの部分が角張っているが、これは『蕃談』の丸い形の方が現物に近い⁽³⁾。

抹香鯨は二〇ないし三〇センチの脂肪層が体を包み込んでいる。これを Blanket または Blubber と呼ぶ。

この皮から油を絞りとるのが当時の捕鯨の最大の目的だった。二等航海士はこの皮の部分に切り目をいれて行く。その幅は約六フィートで証言どおりである⁽⁴⁾。

この作業は Scarfing と呼ばれる。幅六フィートに切り取られた脂肪層を Blanket Piece と呼ぶ。この Blanket Piece に穴をあけ、鉤 (Hook) を差し込み、さらに滑車を取付ける。滑車からのロープはメイン・マストに取付けた滑車を経由して、普通船首甲板に据え付けられた巻揚機 (Windlass) につながっている。

漂流民のいう「萬力車」で、『蕃談』では「大絞車」と表現している。ロープは証言どおり二本である。巻き揚げ機は十人ばかりの乗組員がハンドルで回転させるのだが、『蕃談』にはその説明と図が添えられている。これらは極めて正確である。Blanket Piece を引き揚げるとき、船には五〇トンほどの荷重がかかることに

なり、船は大きく右舷に傾く。引き揚げながら

Spade で鯨体から脂肪層を切り離してゆく。脂肪層が徐々に引き揚げられ、長さが約三メートルくらいになるとそこで切り離し、別の鉤を付け次の部分を引き揚げる。これを繰り返すと鯨体は作業につれ「くるり／＼」⁽⁵⁾と回転する。次郎吉はその様子を「略刀子ニテ果皮ヲ削ルニ類ス」(286・上)と語っている。果物の皮を剥くようにというわけだ。次郎吉が古賀謹一郎に漂泊の日々の模様を語ったのは弘化元年(一八四四)前後のことだと思われるが、それから六年後 Melville はこの作業を「柑の皮を剥くようだ」と表現することになる⁽⁶⁾。

最初に切り取った頭部の処理についての証言は次のとおりだ。

切りはなし置候鯨の首は、切口を仰向候て、脳髓の處まで穴を明け、吊瓶をもって脂肪を汲とり、鯨の大小により候へ共、大抵四斗樽に拾五六杯も有之候。此脂肪は別に桶に入れおき、蠟燭に拵へ

申様子に候。扱首は上髯と下髯と切はなし、萬力車にて船中へ引入れ、「シヨースペル」にて小口切にいたし、夫に切目をつけたるを鉤に掛、釜へ入れ煮候て、脂肪を取申候。(32・上、32・下)

抹香鯨でもっとも目を惹く部分が、頭部である。成長した雄では全長の三分の一に達するものがある。当時の捕鯨産業は頭部を三つの部分に分けて別々の処理をした。切り離れた頭部は漂流民が述べるように切り口を上に向け、船尾に吊りさげるか、あるいは小型のものは甲板上に引き揚げて吊り下げた。『時規物語』出は比較的大きな鯨だったのだろうか、船腹に釣り下げた図を添えている。

まず Case と呼ばれる部分だが、内側は膜に覆われ、外側を筋肉組織が包み込んでいる一種の容器で、高純度の脂肪酸が詰まっている。当時唯一の抹香鯨の専門の博物学者 Thomas Beale に拠ると約一トン、容量で一〇バレル(約一五〇〇リットル)のいわゆる脳油(Spermaceti)が詰まっている⁽⁷⁾。鯨の体温で液状を

保つが、大氣中に放置すると固体化する。この貴重な物質は Case に穴を明けバケツでくみ取って樽へ納める。バケツにはボールを付けてくみ取る場合が多かったようだが、漂流民達は「吊瓶」を使つたと証言している。Case の下の部分は Junk と呼ばれ、スポンジ状の組織のなかに多量の Spermaceti を含む。この部分は証言どおり、釜で煮て油を採取する。用途は高級蠟燭、薬品、精密機械の潤滑油などで、これも証言どおりだ⁽⁸⁾。古くはこの Spermaceti が万能薬と考えられたこともあった⁽⁹⁾。漂流民達は蠟燭に「キャンロシ」あるいは「キャンロー」の語を当てている。抹香鯨は下顎に歯があり、上顎には歯がなく、下歯を受ける臼のようになっている。下顎からは歯と骨を採取し、前述のように細工物に拵える。「下歯有之、上髯は臼の様に相成候。齒は鹿角杯のやうに細工に遣い申候。」(34・上)

脂肪室に集められた Blubber のその後の処理についても、漂流民達の証言は詳細を極める。

全身より追々切取候脂肪皮は厚きところ六七寸、長さ壹丈計宛有之候を、大き五六寸に壹尺五六寸計宛にきり、夫を壹尺餘の鉤にて壹人おさへ居、また壹人は菓種をきざみ候兩手と申様の刃物にて、四五歩計宛に切目を入候。是を鉤にて引掛、鱸の方に居置たる貳つの釜へ投入、追々煮詰申候。(釜は指渡四尺餘、深さ貳尺七八寸も有之候。鹽燒釜の形に似寄申候。)初めは薪を用ゐ申候へ共、後には煮殻をかね(銅)の網杓子(網杓子は指渡壹尺二三寸柄は木にて四尺計、廻り三四寸も有之候。)にてすくひ取、直様薪の代りに焚申候へば、能く燃候ゆゑ、別に薪は用ゐ不申候。(33・下)

はぎ取られた Blubber は、中央のハッチからすぐ下にある「脂肪室」(Blubber-Room)へと搬入される。この部屋でさらに Blubber はさらに細かく裁断され、通常横二〇センチメートル、縦三〇ないし六〇センチメートルの小片にする。これを Horse-Pieces と呼ぶ。漂流民の「大き五六寸に壹尺五六寸計宛にきり」

と言っているのは、この Horse-Pieces のことだろう。Blanket-Pieces を剥ぎ取り、やうに Horse-Pieces にしてゆく作業はすべての解体が終わるまで続けられる。

解体がすべて終わり、脂肪室で Horse-Pieces がうづたかく積まれる様になると、いよいよ搾油作業(Trying-Out)が始まる。脂肪室から甲板上の「裁断台」(Mincing Block)へ運ばれた皮は、そのうえで細かな切り目を入れられる。使う道具は日本で菓草や煙草を刻む「兩手」そっくりのもので、細断ナイフ(Mincing Knife)と呼ばれる。この時完全にきるのではなく、ほんの少しだけ切らずに残しておくので背表紙のついた本のような形になる。これを「聖書のページ」(Bible-Leaves)と呼ぶ。漂流民達が「切る」と言わずに、「切目を入候」と言っているのは、このことを表現しようとしたのだろう。おそるべき観察と言わざるを得ない⁸⁰。

Bible-Leaves は、次々と搾油釜(Trying-Pot)に投げ込まれそれを煮る作業が始まる。釜は二基あり、

それぞれ一五〇ないし二〇〇ガロン(五五〇ないし七五〇リトル)の容量を持つ¹⁰⁾。大きさの見積もほぼ正確である。形は「鹽釜」によく似ている。通常船首よりの甲板にしつらえられたレンガ造りのかまどに据え付けられる。このレンガは航海が終了するとき解体し、海に捨てる習慣があった。燃料は最初薪や木片、おがくずを使い、やがて煮殻ができてくるとそれを網しやくし(Skimmer)ですくい取り、燃料とする。このとき搾油炉からは黒い煙が吐き出される。黒グロとした煙を吐くアメリカ捕鯨船の典型的姿だ。すべての脂肪皮を煮だしてしまいうまで、昼夜を問わず続けられるこの作業をMelvilleは、印象的な一章に仕立てている¹¹⁾。

James Loper 号の航海日誌によると、七月三一日から八月五日まで六日間連続で搾油作業がおこなわれている。この間何故か風が強い日が続いた。搾油作業の煙は太平洋を低く流れていったはずだ。八月三日は南南東からは強風が吹き付けていた。船は船首を東に向けて停船していた。右舷から風を受け、煙は左舷の方へ流れていった。

救出後三か月以上たった九月三〇日には午後四時、鯨を発見し、すぐさま追跡に入り、二頭を仕留めている。翌朝九時に解体が始まり、一〇月一日午後煮搾油が始まる。同船では「Trying-Out」ではなく「Boiling」という用語を使っている。この作業は一〇月二日の午後二時によりやく終了する¹²⁾。この間も強風が吹いていた。一〇月一日の夜は一晚じゅう炉が赤々と燃え、黒グロとした煙が太平洋の夜空に消えていった。次郎吉達は日焼けした顔に炉の炎を映しながら、油と煤に塗れ黙々と働く捕鯨船員達の動きをじっと見つめていたのだろう。

油が溜まるとそれを汲み出し、冷やしてから樽に詰める作業が待っている。

追々釜に脂肪たまり候へば、杓にて桶へ汲取申候。此脂肪は多分焼し油に用ゐる申す様子に候。船底の大桶へ脂肪をつぎ込候節は、長さ壹丈又貳丈計の革樋のやう成物へ、指渡し貳尺計の漏斗をさしい

れ、夫より注入候。若遠く候て桶へとゞき不申時は、革樋をつぎ立、其つぎ目は螺旋に仕掛有之候。桶は貳石計入候胴帳の形にて、鐵輪を入有之候。

是も無用之節は、膊底輪等取離しつみおき候。鯨を獲候と直に夫々取集桶に組立候。其節膊と膊の間へ、蒲の葉の干たるをはさみ申候。是にて能しまり、漏り不申候。(33・下、34・上)

搾油釜に鯨油がたまると、それを汲み取り釜の横に据えられた銅製の大金にいったん入れる。汲み取る道具は杓のようなもので、Bailer と呼ばれる。大金は油を冷ますためのもので Cooling Tank と呼ばれる。油が冷えてくると、今度は六バーレルくらいの大樽 (Cask) へ移し変える。この大樽は、搾油炉直下の船倉にある場合もあり、五ないし六基が置かれていたようである。この時簡易ホースや漏斗を遣うのは証言どおりである⁴⁴⁾。

漂流民の証言にはないが、鯨油はそのまま数日間放置され十分に冷やされる。その後最終的に樽に詰め替

えられ、船倉に保存され、母港に運ばれる。温かい鯨油を直接船倉の樽にいれると、箍が収縮し、油漏れの原因となる。この時の作業を「積み込み」Storing Down と呼ぶ。船倉の樽は元々様々な資材が詰め込まれているか、あるいは解体して積み込まれている。鯨を仕留めるとそのつど樽を組み上げる作業も伴う。これは専門の桶職人が行なう。

James Loper 号で漂流民が乗っている間に鯨を取ったのは、七月二二日 (一頭)、七月二七日 (頭数不明)、七月三〇日 (一頭)、七月三一日 (一頭)、八月一日 (一頭)、九月三〇日 (二頭)、一〇月二日⁴⁵⁾ (二頭) である。七月末から八月に集中して取っているが、八月五日に「樽造り」(Coopering) と「積み込み」(Storing Down) が行なわれ、積み込みの方は八月六日まで続いている⁴⁶⁾。おそらくは七月二七日からの約六頭分を船倉に積み込んだのだろう。その間油は甲板か、あるいは甲板のすぐ下の部屋で冷やされていた。一度に多くの鯨油を積み込むことから樽が不足し、急遽樽を造ったのだろう。九月三〇日と一〇月二日の三頭分は、

一〇月三日に搾油作業終了後二日間冷却され、一〇月五日に船倉へ納められている¹⁾。

解体、搾油作業はいったん始まると終了するまで中断無しで続けられる。乗組み員達は二グループにわかれ、六時間交代で作業に従事する。その間は睡眠時間や食事は最小限にへらされる。船は普通気象条件や地理的条件が許せば、漂うにまかせる。James Loper号の場合、七月三一日から「積み込み」が終了する八月五日まで、北緯三一度の海域に留まっている。経度は八月二日の西経一八二度三九分が記されているだけで、おそらく大きな移動はなかった。全員が解体・搾油作業に従事し、船は縮帆したまま留まっていたのである。

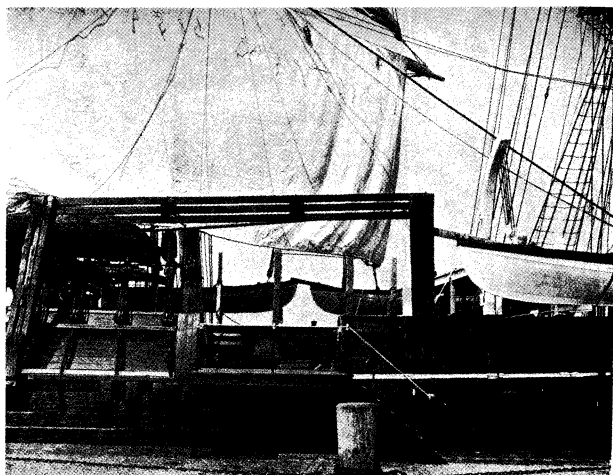
漂流民達が語る捕鯨作業は細部に渡るまで正確である。遠藤達は日本の捕鯨に関する知識を書物などから用いることが出来たかも知れない。しかし、客観的な知識を記述することを目的に、時にははしかり、時にはなだめ、ロープの太さや刃の形状にいたるまで微にいり細にいり訊問を続けてゆくうち、次第に全容を明らか

かにしてくるアメリカの帆船捕鯨という産業の実体に息をのんだだろう。太平洋という分厚い壁にあげられた小さな穴からは、捕鯨船を先頭にして押し寄せてくるアメリカの姿が見えただろう。

註

- (1) 一九世紀になると抹香鯨に関する科学的研究がさかになる。多くの文献が挙げられるが、特にここでは実際捕鯨船に船医として乗り組んだり、捕鯨産業のための航海を行なって実見した人の手になるものを挙げておく。James Colnett, *A Voyage to the South Atlantic and round Cape Horn into the Pacific Ocean for the Purpose of extending the Spermacete Whale Fisheries and other Objects of Commerce* (London, 1786) には Da Capo 社の叢書 *Bibliotheca Australiana* に復刻収録されている。Colnett はイギリス最大の捕鯨会社 Samuel Enderby and Sons の依託により最初に太平洋の抹香について調査した人物である。この調査書にはすでにガラパゴス近海の抹香資源に関する報告がある。十九世紀のものとしては Thomas Beale, op. cit. (1835 : 1839) と Frederick Debell Bennett, op. cit. (1840) を挙げておく。特に Beale の著作は解剖学的見知からの詳細は報告があり、注目に値する。

(2) EPH., pp. 161—162.



註(2) 足場の図

- (3) ハ・註33の図で上から四番目の道具がスピードである。
 (4) 抹香鯨の解体用ダイアグラムは前出の Colnett (1798) に
 すでに登場し、Beale (1835 : 1839) にも詳細に描かれ、
 Scammon (1874) に引き継がれてゆく。このことから少な
 くとも一八世紀末には抹香の解体が完全に定式化されてい

たといえる。おそらく文書にはなっていないものの、一八
 世紀の初期にはその方法が成立していたのではないか。
 解体ダイアグラムを挙げておく。

- (5) EPH, pp. 168—169.
 (6) herman Melville, *Moby-Dick*, ch. 67.
 (7) 当時の解剖学的所見としては Beale (1839) pp. 127—
 129 がある。Beale はこの中で他の研究者を引用しながら
 成分分析表も提示している。イギリスで最初に脳油を科学
 的に記述したのは Beale による。John Hunter だが、筆者
 は未見である。
 (8) 抹香油等の利用流通に関してはイギリス捕鯨の記述が中
 心ではあるが次の研究書が詳しい。Gordon Jackson, *The
 British Whaling Trade* (Archon Books : Connecticut,
 1978)。
 (9) 例えば Beale (1838) p. 128.
 (10) 例えば EPH, pp. 168—172 等を参照。
 (11) EPH, p. 172 等を参照。
 (12) Herman Melville, *Moby-Dick*, ch. 96.
 (13) 七月三十一日から八月五日までの航海日誌は本論八の註(9)
 参照。一〇月一日、二日の航海日誌発議のとおりである。
 JLB October 1st 1839
 Remarks on tues (sic) Oct the 1 1839
 All of these 24 hours Strong breezes from the NE
 Employed In Boiling Lait by obs 21 : 22

(15) (14)

Longi by Chron 154 : 00

JLLB October 2nd 1839

Remarks on Wed (sic) oct (sic) the 2 1839

All ofm these 24 hours Strong breezes from the NE

At 2 PM finished boiling At 4 Saw whales lowd

Struck caught one At 8 AM Cut the whale and began

to boil Lati by obs 21 : (***) Longi 154 : 12

EPH., pp. 174-175.

七月二二日、二七日、三〇日、三一日、八月一日の航海

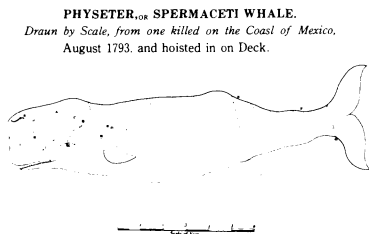
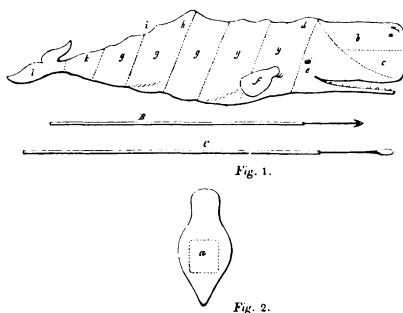
67. Thomas Beale, *Natural History of the Sperm Whale* (London, 1839), p.9.

Fig. 1 represents the outline of the entire form.
Fig. 2 that of the anterior aspect of the head.

68. Charles M.Scammon, *The Marine Mammals* (New York, 1874), p.237.

(17) (16)

日誌は本論(八)註(一九)一〇月
九月三〇日に関しては本論(八)
註(四二)一〇月二日は註(三)参照。
本論八註(19)(22)の航海日誌参照。

JLLB October 3rd 1839

Remarks on thurs (sic) the 3
1839

All of these 24 hours Strong
breezes from the East Stood to
the NNE and SSE At 10 AM
finished boiling Lati by obs
21:10 Longi by CV'chron 154 : 21

JLLB October 4th 1839

Remarks on friday the 4 1839

All of these 24 hours Strong breezes Stood to the
South And NNE Lati by obs 21 : 37 Longi by Chron
154 : 13

JLLB October 5th 1839

Remarks on Satur (sic) the 5 1839

All of these 24 hours Strong breezes from the East
Stood to the South Employed In Storing down Oil
Lati by obs 20 : 37

10 「スッパンホエル」の形状は・・・「カスロット」に甚相似り。―鯨に関する知識―

漂流民達はアメリカ捕鯨船の獲物である鯨を「スッパンホエル」と記憶していた。『蕃談』では「スッパンモイル」となっている。確かに当時の太平洋に展開するアメリカ、及び、ヨーロッパの捕鯨船は、一八世紀初頭から捕鯨産業資源として注目されてきた抹香鯨 (Sperm Whale) を、主な獲物としていた。特に James Loper 号はじめ、漂流民と何らかの関係を持った北太平洋の日本近海で操業した捕鯨船はすべて抹香鯨を狙っていた。本論第一部で詳述したように、小笠原を中心とする日本近海は一八一八年頃に新たに開発された一大抹香鯨捕鯨場であり、「ジャパン・グラウインド」の名がある。James Loper 号が航海していた一八三八年から一八四二年までの港湾記録のよると、この四年間で主としてニューイングランドの岸辺を離れた捕鯨船のほとんどが太平洋へ向かっている⁽¹⁾。この

うち大多数が、途中乗組員の訓練のためオキゴンドウクジラ (Black Fish) を取ったことを除けば、抹香専門船だった。太平洋の展開した捕鯨船が抹香以外の獲物を取るようになるのは一八四八年、ベーリング海で北極背美鯨が発見されてからである⁽²⁾。

西洋の遠洋帆船捕鯨は一七世紀初頭から開始される。当時の主力はイギリスとオランダであり、スピッツベルゲン、ヤンメイエン、グリーンランド、デーヴィス海峡等を捕鯨場とし、北極背美鯨を獲物とした。体長一八メートル、体重六、七〇トンに達するこの巨鯨は、比較的動きが遅く、油の産出量も多く、また死んだ後海上に浮かんでいることから、真っ先に帆船捕鯨の獲物となった。「正しい獲物」という意味で、Right Whale と呼ばれる⁽³⁾。一方一八世紀から捕鯨産業の中心的獲物の第一位に躍り出る抹香鯨は、航海日誌では単に Whale と表記される。James Loper 号が漂流民達を乗せていた間の記録では、七月一六日、七月一七日、七月二二日、七月二七日、七月三〇日、七月三一日、八月一日、八月二六日、九月三〇日、一〇月二日の都

合十回に渡って「抹香鯨発見」(Saw (A) Whale (S))の記載がある⁽⁴⁾。

『蕃談』には抹香鯨以外の鯨についての記述がある。

小頭ノ鯨ヲ「ヘンベキトン」ト稱ス。(我「カツヲ」鯨「イワシ」鯨ノ類)即チ尋常ノ賤品ニシテ噴水ノ孔ハ項後ニ啓ク。其齒ハ毛茸アリ。本邦諸工ノ用ユル鯨鬚也。番人油寡シトテ海ニ浮クヲ見ルモ捕ヘサル事アリ。之ヲ獲モ頭ハ蠟無ト云直ニ截去ス。

「ヘンベキトン」のことを古賀は「カツヲ鯨」あるいは「イワシ鯨」であるという。日本では古来「六鯨」と言つて六種の鯨を区別していた。もっとも古い鯨絵巻の一つと言われる「鯨類絵巻」(文部省史料館蔵、成立推定寛文年間)は、鯨、イルカ、ゴンドウの三種類を描いた後、いわゆる「六鯨」を描いている⁽⁵⁾。

「鯨鯨」、「長須鯨」「まっこ鯨」、「兒鯨」、「座頭鯨」、「背美鯨」の六種である。「六鯨」と言い習わしはじめ

た土地や時代に関しては不明だが、少なくともこれ以降の鯨に関する文献ではこの習慣と踏襲することが多い。

カツオ鯨は別名イワシ鯨と呼ばれ、ナガスクジラ科の一種である。ナガスクジラ科にはナガスクジラ属とザトウクジラ属の二属があり、前者はシロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ、ミンククジラの五種で、*Rorquals* と総称される⁽⁶⁾。後者はザトウクジラ一種だけである。「六鯨」の中の「鯨鯨」は、現在のイワシクジラであり、*Sei Whale* と呼ばれる。*Sei*「サイ」はスケソウダラに似た魚で、この鯨と餌が共通のところからこの名がある。一八六〇年代までノルウェイでは、この鯨がサイを連れて来ると信じられており、捕鯨者と漁業者の間でこの鯨の捕獲を巡って争いが生じている。明治期に入って日本各地でおこる捕鯨者と漁業者の対立も同じような理由による⁽⁷⁾。日本ではこの鯨の餌がカタクチイワシであるところからこの名がある。

ただ、太地方面で捕獲されるイワシクジラは本来の

イワシクジラと若干違う種で、現在はニタリクジラと呼ばれている⁽⁸⁾。古賀が言及しているのはおそらく、現在のイワシクジラか、あるいはニタリクジラだと考えられる。「鯨」に関する図版は『鯨志』、『日東魚譜』、『海鰐談』あるいは『除蝗録』などを参照することが出来たはずである⁽⁹⁾。漂流人達の証言にしたがつて『番談』には「ヘンベキトン」の図が添えられている。これは明らかにイワシクジラあるいはニタリクジラ、もしくはナガスクジラと思われる。いずれも北太平洋の、James Loper 号が通過した海域を回遊する⁽¹⁰⁾。また次郎吉が述べているようにイワシクジラの髭は日本でも「諸工ノ用ユル鯨鬚」である。

James Loper の航海日誌では、六月八日に Finback と Blackfish⁽¹¹⁾ 九月三日に Finback 目視の記述がある⁽¹²⁾。James Loper 号の航海日誌全体でも、登場する抹香鯨以外の鯨はこの二種だけである。後者は前述のようにおそらくゴンドウクジラであり、前者はナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラの総称(Roquais)を指していると考えられる。当時の捕鯨船はほとんど

Roquais を捕ることはなかった。「ヘンベキトン」は一方でザトウクジラの英語名 Humpback の転訛とも考えられるが、残された図からはザトウクジラの可能性は低い。アメリカ捕鯨船がザトウクジラをとるようになるのは一八五〇年以降のことである⁽¹³⁾。

遠藤は「スッパンホエル」について主として宇田川榛齋の『遠西医方名物考』を参照にしながらかなり詳細な解説を付け加えている。

按するに漂流人いふ所の「スッパンホエル」の形状は和蘭にいふ處の「カスロット」に甚相似たり。「カスロット」は肥前の五嶋、紀伊の熊野にて真甲鯨と呼ぶ大魚の類なり。(34・上)

遠藤が利用したのは『遠西医方名物考』卷三十二の「斬百兒麻攝的」と「加失禄篤形状」の部分だ。『名物考』には図版は付けられていないが、遠藤は「スッパンホエル」が「加失禄篤形状」に挙げられている「カシュロット」だと同定する。『名物考』には「ペイセル

マクロセハリユス」というラテン語の学名と、「カセロット」あるいは「カシュロット」が挙げつてゐる。前者はラテン名 *Physer Macrocephalus*、後者はフランス名 *Cachalot* で、こちらは国際的に通用する名前でもあった。日本の産地もすべて正確だが、『名物考』そのままである。

遠藤は宇田川の『名物考』をそのまま引用する形で、この「カセロット」の種類を挙げている。「カセロット」はまず四種類にわかれる。

第一種 (小加失禄篤)

此一種 白「カセロット」

第二種 「ポットヒス」または「ポットワルヒス」

第一品 「スペルマセツトワルヒス」

(第二品 全軀帯緑色ニテ堅硬ノ頭蓋アリ)

リ)

(第三品 全軀灰色ニシテ腹白色)

(第四品 頭大ニシテ全軀ノ半バニ居リ

其形状鳥銃ノ床尾ノ如シ)

(第五品 通例六七丈計。圓ミ三四丈計

アリ)

第三種 小眼「カセロット」

第四種 「マストヒス」

〔註・(一)内は、宇田川が言及し遠藤が省略したもの〕⁴⁰⁾

宇田川がどのような資料を参考にこの分類を書いたかは、筆者も調査中であるが、おそらくオランダ系の書物が種本としてあるのではないか。現在抹香鯨は、マッコウクジラ科マッコウクジラとマッコウクジラ科コマッコウの、一科二種に分類されるだけである。クジラ目は大きくヒゲクジラ亜目とハクジラ亜目にわかれる。宇田川の参考にした書物はおそらく、ハクジラ亜目の鯨数種について述べているのではないだろうか。ハクジラ亜目は頭部に脳油を納めたメロンと称する器官が発達しているものが多い。

第一種の「小加失禄篤」は、もっとも小さいこと、

体長が七メートルであること、鰭がないことを特長としてあげられているが、これだけでは特定できない。

白「カスロット」はおそらくシロイルカと考えられる。

シロイルカは全身白または乳白色で、体長が最大四、五メートルに達する。『名物考』の「白色ニシテ黄色ヲ帶ブ。長サ一丈五六尺」の記述はぴったりである。

第二種の「ポットヒス」ないし「ポットワルヒス」は、ドイツ語ないしオランダ語で「丸い頭の鯨」を意味する。通常これは抹香鯨を指す言葉で、その一種に「スペルマセツトワルヒス」を挙げているのは混乱している。おそらく原本の混乱をそのまま反映しているのだろう。『時規物語』成立期にはヨーロッパ、アメリカでは相当正確な鯨の分類が行なわれていたので、この点から宇田川が利用したおそらく原本は一八世紀に成立したものと推定できる。第二品から第五品、そして、第三種、第四種は同定出来なかった。おそらくは抹香鯨の固体差が分類に反映しているのではないだろうか。これも今後の調査を要する。

註

- (1) Alexander Starbuck, *History of teh American Whale Fishery* (Washington, 1879) vol. 2, pp. 342—396 の港湾記録から算出した。なおこの記念碑的著作に関しては本論(第二章註(2)参照。
- (2) John R. Bockstoe, *op. cit.*, pp. 21—29 参照。
- (3) 初期北極海捕鯨に関つては William Scoresby, *op. cit.*, (1821), Martin Conway, *No Man's Land* (Cambridge at the University Press, 1906) もつては Gordon Jackson, *op. cit.* 等を参照。
- (4) 七月一六日の航海日誌のエントリーは本論第八章註(8)、七月一七日、二二日、二七日、三〇日、八月一日に関しては第八章註(9)、一〇月二日は第九章註(3)、九月三〇日第八章註(42)参照。八月二六日に関しては次のエントリーがある。
JLLB August 26th 1839
Remarks on Mond (sic) the 26 1839
All of these 24 hours light breezes from the ESE
Stood to teh (NE) And South At 2 PM Saw whales
lowd and chased (****) So ends Lati by obs 31 :
28
Longi by obs 178 : 26
- (5) 熊野太地浦捕鯨史編纂委員会編『捕鯨絵巻』卷之一、平凡社、昭和四四年。
- (6) E. J. シュライバー著、細川宏／神谷俊郎訳『鯨』、東京

大学出版会、一九八四年、ロバート・ガスキン著、大隅清治訳『鯨とイルカの生態』東京大学出版会、一九八四年等を参照。
 (7) 石田好数著『日本漁民史―海に生きる人々の生活と歴史―』、三一書房、一九七八年は捕鯨と零細沿岸漁民との闘いを描いた研究書。

(8) 大村秀雄著『鯨を追って』岩波新書、一九八八年参照。

(9) 梶取屋次右衛門『鯨志』、宝暦一〇年(甲南女子大上野文庫所蔵)には、世比古矢刺(セビクジラ)、那加思古矢刺(ナガスクジラ)、座頭鯨(ザトウクジラ)、那比沙狐度宇(ナイサゴトウ)、矢布狐度宇(シホゴトウ)、窩布奈武狐度宇(オホナンゴトウ)、沙加未打(サカマタ)、阿魁比古矢刺(アソビクジラ)、加子倭子矢刺(カッオクジラ)、奴魁子矢刺(ノソクジラ)、末子狐子矢刺(マツコクジラ)、狐古矢刺(コクジラ)、付録として以○矢古矢刺(イワシクジラ)が図版と共に上がっている。その他の鯨の分類例を若干挙げておく。

①大蔵長常著『如蝗録』、文政九年(一八二六)(甲南女子大学上野文庫所蔵)

イルカ／コト鯨／長須鯨／鯨(鯨鯨)／マッコ鯨／座頭鯨／背美鯨／シャチ(サカ又)／兒鯨／大魚○

②勇魚取絵詞、文政十二年(一八二九)(甲南女子大上野文庫所蔵)

背美鯨／座頭鯨／兒鯨／鯨鯨／タカマツ(サカマタ)／長須／ニタリ

③木村厚著『会鯨談』(甲南女子大上野文庫所蔵)
 背美／座頭／長須／鯨鯨／真甲／小鯨

④紀州産物帳(享保紀州産物帳)(甲南女子大上野文庫所蔵)

せみ鯨／ざとう鯨／いわし鯨／ごとう鯨／どんど鯨
 ⑤和歌浦捕鯨俗語(逢左文庫所蔵)

セビ鯨／座頭鯨／兒鯨／マッコ鯨／長ス鯨／ナイサゴト／大ナンゴト／潮コト／筋イルカ／イルカ／シャチホコ(サカマタ)／カマイルカ／赤ホウ

(10) 大隅清治監修、笠松不二男・宮下富男著『鯨とイルカのフィールドガイド』東京大学出版会、一九九二年参照。

(11) 六月八日の航海日誌のエントリーは本論(八)註(17)参照。
 (12) 九月三日二は次のエントリーがある。

JLB September 3rd 1839

Remarks on tues (sic) the 3 1839 All of these 24 hours light breezes Steered E(*****) Saw finbacks

(13) Lat. by obs 29 : (*****) Longi by VChron 172 : 07
 一八四四年 Cathcart 指揮の Emerald 号は八月小笠原近

海で操業しているが、その航海日誌には Finback と Humpback 両方を目視し手いる報告がある。現在戻りつつある小笠原の座頭鯨の親達だろう。

(14) 宇田川榛斎著『遠西医方名物考』(名古屋大学所蔵)巻之三三。